

日五十二月六

萬物に感謝する敬虔な心

○明治五年……新紙幣十圓五圓二圓の三種を發行す

○明治十七年……明治天皇上野停車場に臨幸鐵道開通式を視給ふ

金原明善の感謝生活は如何にも徹底してゐた。一足二十錢位の朴齒の下駄を買ふと、晴天にも雨天にも三年はそれを履き通した。齒がちびれば入れ替へ、緒が痛むと繕き替へ、履けるだけは履いて、いよく履けなくなると最後にその下駄を綺麗に洗つて、縁の上へ上げて「さてお前にも長々世話になつたが、もうお前も働けなくなつたから長の暇をあげる。どうか老後を安樂にしておくれ」と、まるで人に物言ふごとく挨拶をして、庭樹の下に埋めてやるのであつた。手拭一本でも端が穢れると中央から切つて兩端を縫ぎ合せて使ひ、使へなくなると雑巾に下し、更に役立たなくなつて初めて例の通り挨拶をして庭に埋めた。また朝晩布團に寝起する時には、お前のおかげで風邪もひかず、寒い目にも合はず安樂に一夜を眠ることが出来たといふ風に一々謝辭を述べ、挨拶をしてゐた。

日六十二月六

物に親切な人は人にも親切である

○明治元年……伊勢大崩熱田神宮に大政復古を告げ給ふ

○明治三十五年……我國獨特の養殖眞珠特許登録さる

金原明善は勤儉力行の人で、己を忘れて人の爲に圖つた。常に質素粗食に甘んじ、廣く公益事業に盡した。また決して物を粗末にせず、使用の出来るまで利用した。たとへ新聞紙一枚でも途に落ちて居れば、これを拾つて來て、文字のないところでは状袋を貼り、印刷の所では手習をした。さうして常に「物に親切な人は、人にも親切である。物を大切にすれば、必ず人を大切にすれば、夜具や下駄は物を言はぬが、もし物が言へたら不平をいふに違ひない。物に對して感謝するのは、感謝生活の基礎となるのである」と云つてゐた。即ち彼の感謝生活の第一歩は、物を大切にせよといふにあつた。物を大切にすることは、單に節約からばかりでなく、物の効用を十分に發揮せしめることになる。人は廢物を利用をする前に如何にして廢物を少なくするか心に掛けねばならぬ。

日七十二月六

志は己を知るものに伸ぶ

○文明十五年……銀閣寺成り義政之に移る

○寛政五年……高山彦九郎自刃す

京都三條の橋の袂に、勤王家高山彦九郎の銅像が建つてゐる。彦九郎は王道の衰微を嘆き、尊王の精神に燃え、諸國を周遊して學徳の士と交はり、大義名分を説いて、人心を激勵し、義氣を鼓舞した。曾てこの三條の橋上に跪いて皇居を拜し、「草莽の臣高山正之」といつて涙を流し、通行の人の笑ふのも顧みなかつた。その時の姿が銅像に造られてゐるのである。足利高氏の墓を過ぎてその罪を數へ、これを鞭つたといふことは有名な話である。露國の船が屢々北海を侵すので、彦九郎は寛政二年、蝦夷地に赴き、事情を調査した。同五年京都に歸り、偶々鴨川で緑毛の龜を得たので、祥瑞として伏見宣條に呈し宣上はこれを光格天皇の勅覽に供した。其時彦九郎は密かに天顔を拜するの光榮に浴し「我をわれとしろしめすかやすめらぎの玉の御聲のかゝるうれしさ」と詠じた。

日八十二月六

世の中に恐しきものは馬鹿と借金

○明治三十年……モリソン山に新高山の新稱を賜ふ

○大正三年……オーストリア皇太子狙撃され世界大戰の因となる

蜀山人の狂歌に「世の中に恐ろしきものはなけれども家の漏るのと馬鹿と借金」といふのがある。家の漏るのは家賃の溜りで、先づこれはどうにかならう。馬鹿につける薬はないといふ。それでも、馬鹿と飲は使ひやうできれるともいふから、これも先づよし、只氣違ひに刃物は少々危い。地震、雷、火事、親爺、恐いもの、四天王と昔から相場が極つてゐるが、今ではこれを「地震雷、火事、息子」といふさうだ。親爺より息子が恐くては、それこそ恐い見たやうなものである。だが「身過ぎ世過ぎ」はまだ恐い。その中で、借金ほど恐いものはあるまい。世の中には借金王などと稱せられる變な王様があるが、この借金一度借りたら中々返せない。首が廻らぬばかりでなく、家藏は持つて行かれる世間に顔出がならず、一家子孫にまで、苦勞と恥辱とを嘗させないでは置かぬ。

日九十二月六

一紙と雖も無駄にはされぬ

○明治十二年……東京九段坂上に招魂祭を行ふ
○明治十二年……米國前大統領グラント來朝す

澤庵禪師の語録の一節——紙を徒に費す重あり、之を戒めて曰く、往古のとき蔡倫字は敬仲、始めて樹皮及び敝布を用ひてこれを爲る、今の爲る所のものは楮皮なり、先づ其楮を植ゑ培養して時至りて之を剪り皮を剥ぎ、水に清し麤皮を去り水に洒し、粘滑のものを熟和してのちその紙を製す、簾の長短の量に應じて紙となし、已後一紙々々悉く板の面に張り、之を乾かし、乾きて後剝取りて五十枚を以て一帖とし、これを切り一帖を重ねて一束とし、以て功を終る、一紙輕しと雖も此の勞を思ふときは則ち重し、輕んずべからず。人の勞を知ることは則ち人のためにあらず、我身を補るにありと。嘗て徳川光圀も侍女等の紙を粗末にするのを見て寒中紙漉場に遣はし製紙者の勞苦を視せしめたといふ話がある。

日十三月六

人間生れて守銭奴となるなかれ

○明治二十二年……改正條約實施の勸語下る
○大正二二年……我國最初の飛行士卒業式を所澤に行ふ

商人の金儲するは元より慾のためなれど、是にも我慾と公慾とあるべし先づ金を儲けて貯めて、家屋を美にせんことを思ひ、また美服美食何事も心のまゝにせん事を的にして金儲けせんとするは我慾なるべし。金銀を儲け不時の困窮にそなへ、先づ差當り親を心よく養ひ、妻子を見苦しからぬやうにはぐくみ、他人を引立て、一門一家の爲に非常の助とせん事を心にはかり、金銀身に從つて奢の心おこらねば是れ公慾といふべし。元來理においても金銀は我が一分の物にあらず。親に家を譲り受け、妻は内を治め、手代は店を勤め、小僧に至るまでその働き整はねば金儲にならぬものなり。然らば我一人其の金銀を費すは家の人の大盗人にあらずや。また身にも用ひず、人にも施さず、一生金銀に使はれて果す人あり、これは此世へ金の番人に來る人なるべし。——(商人夜話草)——

日一月七

日本人は日本の家に住む

○明治十六年……始めて官報を發行す

○明治二十三年……第一回衆議院議員選舉を行ふ

西洋は個人主義の國である。それ故、厚い煉瓦の壁で部屋を圍み、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠を下し、蟄居する時には、どうしても窺ふことが出来ねやうにしてある。いかに親しい間柄のものでも、他人の室に入るには先づ戸を敲く。すると内におる人が「入れ」と應ずる。その聲を聞くまでは今呼んだ女中でさへも決してその戸を開けぬものである。日本は家族主義の國である。されば日本人の住居の様子は、甚しく西洋人のそれと相違してゐる。錠を下した重い戸の代りに日本では紙一重の障子で部屋を圍んでゐる。出入自由である。たとひ一軒の家が五室になつてゐようと、十室になつてゐようと、五室乃至十室の部屋が自から一家をなしてゐる。この家は實に日本獨特のもので、夫婦を始め家族一般、相倚り相信じて一體を作り、その間に一點の秘密をも存しない。

日二月七

自然に還り自然に生きよ

○慶長五年……徳川家康江戸城に入る

○天文元年……荷田春満歿す、年六十八

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。山中へ来て自然の景物に接すれば、見るもの聞くもの面白い、面白いだけで別段の苦みも起らない。苦みがあるとすれば、足が草臥れるぐらゐだ。苦みのないのは何故だらう。ただこの景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を敷いて一儲けする料簡も起らない。腹の足しにもならない、月給の補ひにもならないこの景色が、景色としてだけ余の心を樂ませるから、苦勞も心配も伴はないのだらう。自然の力はこゝに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らせるのは自然である。 (夏目漱石)

正しい道を學ぶには正しい心が要る

○安政二年……幕府洋式銃陣の演習を始む

○明治二十九年……商品としての蓄音機始めて輸入さる

吉田松陰は山鹿流の兵學者の家に生れた人で、その伯父に當る玉木文之進に學び更に村田清風の門に入つた。清風は尊王家の一人で、嘗て「敷島の大和心を人間はゞ蒙古の使斬りし時宗」と詠じたことがある。松陰は十三歳の時、藩侯の前で『武教全書』の講義をして居並ぶ人々の舌を卷かせた程の人である。二十二歳の時、初めて佐久間象山を訪たことがある。象山は中々嚴格な人で、いつも黒羽二重の紋附に緞子の袴を着けてゐた。其時の松陰は木綿の粗服で襟垢が光つてゐた。松陰が鄭重な言葉で挨拶をすると、象山は「拙者に教へを請はうといはれるが、一體其服装は何です。正しい道を學ぶには正しい心と服装が必要ですぞ」と頭から浴びせた。松陰は無禮を謝して一旦引退り、翌日改めて威儀を正して訪れた。爾來象山門下の優秀な弟子となつた。

言行は温厚篤敬を以て第一とす

○安永五年……北米獨立を宣言す(一七七六年)

○明治四年……勅して政教一致の要旨を宣布せしむ

凡て何事にも弊害は伴ふものであつて、此弊を避けて單に理想のみを追ふといふことは到底出来ない。蓋し人の世に處するも亦然りで人格を高めたい、思想を高尙にしたいといふ事のみ精神を集注する時は之を誤解してその結果は徒らに氣位のみ高くなり、自然愛嬌といふものが薄くなり、人に對しても願であしらふ様な風になる。斯くては折角の修養も却つて害となつて、こゝに傲慢不遜の誹を生じて来る。思想は充分これを高尙にすることが必要であるが、その言行は努めて温厚にして篤敬なる事を要する。孔子のいはゆる言忠信にして行篤敬なりとはこの謂ひであらう。蓋し如何に高遠なる思想、深甚なる抱負あればとて、行動に於て篤敬を缺いて居る時は、處世の要術を知らぬものと言はねばならぬ。是れ修養の第一義である。

—(澁澤榮一「處世論語」より)—

又しても不恤緯を書く世とはなり

○文化十年……蒲生君平歿す、年四十六

○明治四十二年……代々木練兵場設置さる

蒲生君平は宇都宮の人で、初め姓を福田といつたが、蒲生氏郷の一族であることを知つてから蒲生氏を名乗るに至つた。夙に勤王の志厚く、寛政十一年、京畿に歴代天皇の陵墓を探り、叡山に登つては、遙かに皇居を伏し拜み、「比叡の山見下す方ぞあはれなる今日九重の敷し足らねば」と詠じ、佐渡に渡つては、順徳天皇の陵に詣でて涕泣これを久しうした。旅から歸ると直ちに山陵志の編纂に従ひ、貧苦窮乏と闘ひながら懸命に努力した。たまたま文化三、四年頃になると、ロシア人が千島唐太に出沒し世論大いに沸騰した。君平はこれを憤り書を幕府に呈し、露國南下の野心は一朝一夕にあらざること説き、露人撃攘を論じ、且つこの機会に、皇室を重んじ、内政を整ふべきことを痛言した。これが「不恤緯」といふ一文で大いに尊王思想と對外思想との一致を強調した。

常識は智情意の調和である

○明治三十三年……第五師團清國に出動す

○昭和二年……青島派遣軍濟南に出動す

常識とはどういふことかといふに、英語のコンモンセンスと云ふ語の翻譯で、聖賢の道とか、道德の極致とか重い意でなく、平生に用ふる事々物々にあるべき事柄を判断識別して中庸を失はざる處の智識、即ち心理學の教ゆるところの智情意の三つが程よくその節に當るといふ事であつて、是れに外れたのが常識に缺けてゐるのである。智情意の三つの中、智ばかり發達して居つても人間は完全なものではない。人は必ず情の發動があつて、喜怒哀樂愛惡慾、これを七情といひ、その七情を發して宜しきを得るは即ち人の世に處して事に當るの節度の極く完全なものである。若し總ての事に當り、七情がないものであつたらそれは人間ではない。又その七情があまり過度に發して行つたならば、必ず人を傷け、己れを誤るものである。

—(濫澤榮一「處世論語」より)—

智情意の權衡を失はぬ人たれ

○明治十七年……華族令を制定し公侯伯子男の五爵を設く

○昭和十二年……北支事變(支那事變)勃發す

常識を手短かに修養するのにはどうすればよいかと云ふに、孔子の教へた仁義禮智信孝悌忠愛、人に對しては老者は之を敬ひ、朋友は之を信じ幼者は之を助ける。親には孝、君には忠、言には訥にして行は敏なれ、斯ういふ様な注意を缺かぬ様に、苟も智と情と意との權衡を失はぬやうに努むるのが肝要である。併し之には發動の度合がある。其發動の度合を超えない様にするのが、常識に缺けない工風である。斯う考へて不斷に其の常識を修養して行くと、或は非凡の人になるといふ事は出来ないかも知れないが、智情意の權衡を失はぬ人となる事が出来よう。斯ういふ人は過が少く、如何なる世に處してもその力丈けには必ず役に立つに相違ない。又能力相應に發展するに相違ない。つまり此意味から申せば智情意の修養は平凡な常道である。(「澁澤榮一「處世論語」より)

常識は凡庸の人にも具へられる

○安政五年……幕府新に外國奉行を置く

○慶應元年……幕府海軍奉行を置く

意志は即ち心の發するもの、即ち心の發動を意味する。而して智情意の三つが丁度具合よく權衡を保つた發し方がいつも節度に當り、その宜しきを得るといふ事が、即ち常識である。此の見地より解釋すれば、大英雄、大豪傑であつても必ずしも此の常識があるとは申されない。普通の人であつても常識は充分あるのであつて、縱令大英雄でも、若し不權衡な人であつたなら、或點に大いに發達してゐる處もあらうが、常識の完備した人とは申されない。例へば彼のナポレオン、豊臣秀吉といふ様な人は、智は如何にも發達して居つたに相違ないが或點は缺けて居る所もある。是等の人は智情意の權衡宜しきを得て、それが皆完備してゐるといふ事は云へぬであらう。斯様に考へると、此常識といふのは吾々凡庸のものでも常に修養すれば必ず過たぬ様に出来るものである。

日 九 月 七

節義を重んじ廉恥を明かにせよ

○明治四十四年……東京電車市有となる

○大正十一年……森嶋外遊く、年六十一

徳川齊昭は光圀の志を紹いで尊王の志厚く、家臣を戒めて皇室の尊
敬に心を傾けさせた。藤田東湖を抜擢して大いに藩制を改革し文武を奨
勵し、天保十二年には弘道館を創建した。又夙に海防の急務を説き領内諸寺の佛
像や梵鐘を鎔解して大砲を鑄造し、西洋兵制に則つた大極陣といふ銃砲隊を編成
した。その遺訓に曰く、「文武の藝を習ふもの、當に文武の道を以て本となすべし
徒に技藝の士となるべからず、天朝、素と武を尙ぶ、而して近古稱する所の武
士の道たるもの、節義を重んじ、廉恥を明らかにし、文道なるもの彛倫を敘し、
徳義を修む、皆、仁義忠孝に出でざるなければ、則ち文武歸を同じうするもの、
學者知らざるべからざる也」と。ことに實行を尙び、言行忠信皆日用實踐を期し
學者徒に高遠深奥を務めて實行を後にする勿れと戒めた。

日 十 月 七

富貴驕るべからず貧賤患ふるなかれ

○明治三十三年……宮城前廣場に楠公銅像竣工す

○明治三十八年……我軍樺太豊原を占領す

一、常に愛國忠君の意を篤くして公に奉ずる事を疎かにすべからず
一、言忠信を主として行篤敬を重んじ、事を處し人に接する必ず其意を
誠にすべし

一、益友を近づけ損友を遠ざけ、己れに詬ふものを友とすべからず

一、人に接するには必ず敬意を主とすべし、宴樂遊興の時と雖も敬禮を失ふ可
からず

一、凡そ一事を爲し一事に接するにも、必ず満身の精神を以てすべし、些事たり
とも之を苟且に付すべからず

一、富貴に驕るべからず、貧賤を患ふべからず、唯々知識を磨き、徳行を修めて
眞誠の幸福を期すべし

— (濫澤家々訓) —

快活と粗暴とを混同してはならぬ

○嘉永七年……幕府大船に日の丸の旗を用ふることを令す
○元治元年……佐久間象山歿す、年五十四

人は須らく愉快に快瀾に、此の世を送るべきである。殊に血湧き肉躍る青年においては、決して悲觀をしたり、又因循臭いことをする様では駄目である。さりながら、あまりに愉快、快瀾といふ事をのみ眼中に置けば、動もすれば、輕跳浮薄の誹を免れない。蓋し日本人の性質は比較的感情が旺盛であつて冷靜に考へるといふ方は少ないやうに思ふ。若し輕はずみに妄動をするが如き事があつたならば、是れ所謂大國民たる雅量に一瑕瑾を生ずるわけで常に中庸を失はざる様にしなければならぬ。往時、學生の袖腕に至るの風は、快は即ち快ではあるかも知れないが、此の如きは粗暴たる行爲で決して快瀾とはいへない。組織的な統一的な今日の社會は、もはやあゝいふ風の横行濶歩を許さないのであるから、粗暴と快瀾とを混用しないやう注意しなければならぬ。

事を敗るは多く得意の時に因る

○大正七年……東京放送局本放送を開始す
○大正八年……明治神宮上棟式を行ふ

人が社會に立つて順境にある場合、或は得意な時代に處しつゝある時陥り易い通弊は、第一、往々調子に乗り過ぎる傾向の者、第二、人間界の萬事は總て自分の意の如くになると思ふ者、第三、斯かる得意の時代は何時もあるもの、何時までも續くものと考へる者などである。従つて其心に油斷とか、或は安逸とかいふものが自然に出來易い。その間隙に乗じて外界の誘惑が忽ちそこにつけ込み、終に一身を誤ることになる。彼の「名を成すは毎に窮苦の日に在り、事を敗るは多く得意の時に因る」といふ句は能く個中の消息を傳へたものである。前途に幾多の希望を抱く青年は、心の緊張を忘れず、逆境に立つて動ぜず、順境に處して驕らず、所謂「貧にして諛はず、富んで禮を好む」といふ先哲の言を實地に行ふやう日常心掛けて、寸時も忘れないことが特に肝要である。

日三十月七

人誰れか我が生死を知らんや

○明治十九年……新たに標準時を定む

○大正二年……公文書に支那國の文字を用ひ始む

生物は皆死を畏る。人は其の靈なり。當に死を畏るゝの中より出でて死を畏るゝの理を練るべし。吾れ思ふ、我身は天物なりと。生死の權は天に在り。常に順つて之れを受くべし。我の生るゝや、自然にして生れ、生れし時未だ嘗て喜を知らず。即ち我の死するや、應に亦自然にして死し、死する時に未だ嘗て悲しみを知らざるべし。天これを生じて、天これを死す。一に天に聽ふのみ。吾何をか畏れん。吾が性は即ち天なり。軀殼は即ち天を藏むるの室なり。精氣の物を爲すや、天この室に寓る。遊鬼の變を爲すや、天この室を離る。死の後は即ち生の前、生の前は即ち死の後なり。而して吾が性の性たる所以のもの、恒に生死の外に在り、吾何をか畏れん。始に原き終に反れば、生死の説を知らん、何ぞそれ易簡にして明白なる。常に此の理を以て自省すべし。 —(佐藤一齋)—

日四十月七

勿體なや祖師は紙衣の九十年

○明治四年……勅して列藩を廢し縣となす

○明治三十六年……西園寺公望政友會總裁となる

凡そ儻きものは此の世の始中終幻の如くなる一期なり。されば未だ萬歳の人身を受けたらといふ事を聞かず。一生過ぎ易し。今に至つて誰か百年の形體を保つべきや。我や先、人や先今日とも知らず明日とも知らず。後れ先だつ人は元の雫末の露よりもしげしといへり。されば朝に紅顔あつて夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風來りぬれば即ち二つの眼忽ちに閉ぢ、一つの息永く絶えぬれば、紅顔空しく變じて桃李の装ひを失ひぬる時は、六親眷屬集つて歎き悲しめども更にその甲斐あるべからず。野邊に送りて夜半の煙となしはてぬれば、只白骨のみぞ残り。哀れといふも中に愚なり。されば人間の儻き事は老少不定のさかひなれば、誰人も早く後生の一大事を心にかけて、阿彌陀佛を深く頼み參らせて、念佛申すべきものなり。 —(蓮如上人御帖)—

日五十月七

天を敬ひ人を敬へ

○安政五年……島津齊彬薨ず、年五十

○昭和四年……東京大阪福岡間飛行機旅客輸送を始む

薩摩藩主島津齊彬は、眉目秀麗、氣品自から備はり、天稟英明の國主であつた。夙に泰西文明の研究に心を用ひ、自ら歐文を記し、當時の諸侯中、識見の遠大第一を以て推された。ことに我が國體と大義名分とを明かにし、皇室尊奉の實を擧げしむるに努めた。安政元年四月、皇居御炎上の時、齊彬は江戸に在つたが、急報を得て驚愕恐懼に堪へず、これ實に幕府が皇室尊奉の實を失へるに對しての天罰であるから、幕府は速かに皇居の御造營をなすべしと自ら卒先五千兩を献上し、聊か誠忠の一端を表し奉つた。孝明天皇欽感斜ならず思召され武士も心あはして秋津洲の國は動かすともに治めむとの御宸筆の御製を賜り、また後に「一朝外患あるに當つては、速かに兵を率ゐて上京し、禁闕護衛の任に當れ」との御内勅を蒙つた。

日六十月七

一つの環を壊せば全體の鎖が切れる

○大正十三年……ロンドン會議始まる

○大正八年……板垣退助歿す、年八十三

「一人一人がつい集つてやがて輪になる盆踊」といふ唄がある。社會は共同の社會である。お互に持ちつ持たれつ、相倚り相援けて行つてこそ社會は成立つ。個人の生活は決して個々に分立して存在するものではない。各個人の相互的協力によつて支持されるものである。夜の更けるのも忘れて興ずる盆踊も、これを一人でやつては氣狂だと嗤はれるであらうが、輪になつて一團となつて、手拍子足拍子揃へてやれば、賑やかに面白く、お互が共に花やぐ。人は常に自分と社會、國家、廣くは人類といふものとの共存關係、連帶關係に意識を置いて自己の生活を営まなければならぬ。自分さへよければよいといふ考へは、決してその自分にさへよき結果をもたらすものでない。共同は力である。「一つの環をこはせば全體の鎖が切れる」といふドイツの俚諺は、實に意味深い言葉である。

日七十月七

能はざるにあらざる為さざるなり

○明治元年……江戸を東京と改む

○昭和十一年……二・二六事件に因る戒嚴令解除さる

出来る事でも出来ぬと思へば出来ぬ。出来ぬと見えても出来ると信ずるが爲めに出来る事がある。ナポレオンは予の辭書に不可能といふ語はないと云つたと傳へられるがナポレオンに限らず、ピットも、ミラボーも同じことをいつたと傳へられる。誰れが云つたか言はないか、そんなことは別として、兎に角、出来ぬと見えたことでも、不可能といふ事はないと信じ、且つ行ふことによつて出来たためしは世に多い。「石に立つ矢のためしあり」とはこの事だ。杉田玄白と並び稱せられた前野良澤といふ徳川時代の蘭學者は、初てオランダの原書を手に入れた時、何が何やら到底讀めさうもない新來の外國文字に對し、オランダ人も人、日本人も人、同じ人間の書いたものが讀めない筈はないといつて苦心慘憺の結果、獨力で獨學でオランダの原書を讀破することが出来たのである。

日八十月七

善事も行はざれば善事にならず

○嘉永六年……露國プーチャチン長崎に來航す

○明治三十五年……西郷從道歿す、年六十

朝夕に善を思ふといへども、善事を爲さざれば善人と云ふべからざるは晝夜に惡を思ふと雖も、惡を爲さざれば惡人と云ふべからざるが如し。故に人は悟道治心の修行などに暇を費さんよりは、小善事なりとも身に行ふを尊しとす。善心發らば速に是を事業に表すべし。親ある者は親を敬養すべし。子弟ある者は子弟を養育すべし、飢人を見て哀と思はば速に食を與ふべし。惡しき事したり、われ過てりと心付とも、改めざれば詮なし。飢人を見て哀と思ふとも食を與へざれば功なし。故に我道は實地實行を尊ぶ。夫世の中の事は實行にあらざれば効はあらず。譬へば菜虫の少なる、是を求むるに得べからず。然れども菜を作れば求めずして自ら生ず。子子の少なる、是を求むるも得べからず。桶に水を溜めおけば自ら生ず。此の道理を辨へて實行を勵むべし。——(二宮尊徳)——

日九十月七

九分は足らず十分はこぼれる

○明治五年……西郷隆盛陸軍元帥となる

○明治四十年……韓國皇帝讓位の詔勅を發せらる

徳川光圀自警の言葉——

苦は樂の種、たのしみは苦しみの種と知るべし。

主人と親は無理なるものと思へ、下人は知らぬものと知るべし。

恩を忘るゝことなかれ。

子程に親を思へ。

掬におちよ、火におちよ、分別なきものにおちよ。

酒と色とは敵と知るべし。

朝寝すべからず。分別は勘忍なり。

小なることは分別せよ。大なることは驚くべからず。

九分は足らず、十分はこぼると知るべし。

日十二月七

至誠は永遠に輝く

○元治元年……平野國臣同志三十二人と共に刑せらる

○明治十六年……岩倉具視薨ず、年五十九

岩倉具視は明治維新の元勳として輝かしい大人物であつた。實に縉紳中
でも殆ど近古比類なき大政治家、大經世家であり、日本歴史中に於て、

彼と比肩すべきは、恐らく藤原鎌足位に過ぎないであらうと。明治二年、明治天
皇は都を東京に奠めさせられ、朝廷に三職の制を定め給うて三條具視を副總裁と
なし、同四年には右大臣に任ぜられ、特命全權大使として、木戸孝允、大久保利
通等と共に歐米各國に派遣された。同六年歸朝の後には、内外益々多事、征韓論の
破裂に伴ふ政變から、内には佐賀の亂があり外には臺灣遠征の事あり、遂に十年
西南の役が勃發した。この國家多難の時に當り、三條實美を助けて明治政府の基
礎を確立したのである。その薨するや、明治大帝は「純忠正を持し、彌綸の宏
猷を畫す、洵に是れ國家の棟梁、寔に臣民の儀表たり」と仰せられた。

日一十二月七

醉生夢死の徒は一木一草に如かず

○嘉永六年……幕府品川沖に砲臺を築かしむ
○大正二年……青山離宮を青山御所と改稱さる

貝原益軒の言葉に「凡そ人と生れて、君のため親のため、助けにもならず又世間に用をなさずして、天地の道に少しの補もなく、人を憐む徳もなく、又人を救ふの功もなくして徒らに天地の物を損ひ費すは、禽獸草木の民用を助くるにも如かずと古人はいへり」とある。一木一草と一口にいふけれども、一樹といへども只生れて死ぬだけのことではない。根は土中に伸び、先其の生命の維持と存在のために水分を吸収し、幹を成長せしめ、枝を張らしめ、葉を茂らしめる。その葉は自ら大氣を呼吸すると共に新鮮なる酸素を人間に供給してゐる。枯れて落ちれば焚木になり、幹は夫々の用途に従つて人間の生活の爲に使用される。獨活の大木といふ諺もあるけれども、人間生れて人のため世の爲にならず、醉生夢死に終つたならば、一木一草にも劣る存在でしかない。

日二十二月七

禁物は未練臆病愚痴不平慢心

○天保四年……幕府始て大阪の富豪に御用金を徴す
○明治七年……巡查佩劍す

人に禁物は、未練、臆病、愚痴、不平、慢心であらう。「池の水草刈り取られても土に思ひの根を残す」といふ俗諺があるが、未練、執着は畢竟悟りのない結果である。死すべき時に死せざれば死するにまさる恥ありといふ。さうむやみに死なれても困るが、ここぞ男の死に所と見極めたら、徒らに女々しく生に未練を残すこと却て一生の不覺ともならう。ただよくよくこゝぞと見極めることが肝要である。男は度胸、女は愛嬌といふ諺もある。臆病も同様で生死の巷に臨んで腰がぬけては立つても居てもゐられまい。愚痴は未練の兄弟分、修養未だ足らざるの致すところと知らねばならぬ。不平はとかく我儘から起る。食物に對する不平、境遇に對する不平、人に對する不平、世間に對する不平、自分に對する不平、我儘が通らない時に起る。我儘が通れば慢心に陥る。自慢、高慢馬鹿のうちだ。

神は愛する者を苦しめる

○明治十五年……京城に内亂起り暴徒王城に闖入す
○明治三十三年……黒田清隆歿す、年六十一

神は愛するものを苦しめるといふ。孟子は「天の將に大任を斯人に下さんとするや、必ず先づ其心を苦しめ、其筋肉を勞し、其髪膚を餓えしめ其身を空乏にし、行其爲すところを拂亂す、心を動かし性に忍へて其能はざる所を曾益する所以なり」と云つた。若い時の苦勞は買つてもせよといふ諺もある。艱難汝を玉にする所以である。天は自ら助くる者を助く。憂きことの尙ほこの上につもれかしと念じて、人事を盡せば、天道は人を殺さぬ。昔から物事を成就し偉人と仰がるゝ人に爲つた者でも、その途中に於ては、もう神も佛もないものかと、失望落膽し、苦しんで苦しんで最後のドタン場まで逐ひつめられた事が多かつた。もうこれが最後だと、一大勇猛心を奮起して、死線を突破し得た時、其處に豁然として曙光を見出し、眼界が開け、新しい道が発見されたためしが多い。

求むるに急なれば得ること難し

○明治三十八年……樺太首府を占領す
○明治四十二年……日韓新協約成る

名譽は人の重んずる所にして財産よりも更に大切なるが故に、之を得るの法も亦易からず。凡そ何ものにも之を求むること急にしていよく急なれば、之を得ることいよく難し。例へば商賣人が利に走ること急にして煩悶するときには、何時も失敗して其商賣の中りは却て意外の邊に在りと云ふ、其意外の利とは初めより利と期せずして恰も之を度外に放棄したる事より大利益を生ずることなり。人間世界有形の商賣にても斯の如し、況んや無形微妙の名譽に於てをや。直ちに求めて直ちに得べからざるは無論、之を求むることいよく急にしていよく煩悶すれば却て反對に既有的名譽をも損するに至るべし。一身の名譽を度外に放棄し、自から忘るれば却て他に知らるゝの原因となり、遠近の尊敬其人に歸し、光明却てつこゝにあつまる。――(福翁百餘話)――

日五十二月七

不義にして富貴なるは浮雲の如し

○明治十一年……日米改正條約に調印す
○明治二十四年……豊島沖に清國軍艦を掃蕩す

徳を立つる者、概ね位なく、富みもせず。孔子は「不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」といへり。若し正當の手段にて富み、且つ貴きを得ば則ち安んじて富貴に至るべしとも思はれんが、實は富貴以外に尙ほ爲すべき餘地の優に存せしを認むべく、孔子は其の區域内に於て大いに發達せる者とすべし。釋迦の如きも然り、ソクラテスの如きも然り。後世の判斷にては、此等の人は至上の地位を占めし者にして、文藝に傑出せる者と殆ど其の壘を摩する勢あり、而して貴人と、富人とは遂に比較するに足らず。生時には富める者最も美まれ、貴き者之に匹敵す。他は實に言ふを値せず。しかも久しきを通じて觀れば、其の位置は全く顛倒するものゝ如し。かくて自然の權衡の得らるゝ也、何ぞ妄りに懊惱するを要せんや。 —(三宅雪嶺「題言集」より)—

日六十二月七

心妄に動けば亂れて明かならず

○明治三十三年……孫逸仙我國に亡命す
○大正四年……青島還附を聲明す

平生の氣象は從容としづかに和樂なるべし。輕卒急迫べからず。和樂は人に生れ付たる天機なり。つねに和樂を失ふべからず。又益なき事を思ひて心をくるしめ、樂しみを失ふべからず、是不智といふべし。心のかろく速きをおさへ、又おこりたるをいましめ、つねに心を定め、早からず、遅からず、よきほどなるが心をおさむる法なり。心は身の主にて、萬事の本なれば、つねにしづかにやすらかにして、妄に動くべからず。心みだりに動けば、亂れて明らかならず、萬事に應じてあやまち多し。事いそがはしき時は、手足のうごき、口の物いふ事は、はやからざれば事に及ばず、心はいそがしかるべからず、手足と目口耳鼻は、たとへば下人の如し、心は身の主にて、目口耳鼻手足の、事のよしあしをたゞす役なり。故に心はしづかならでは思案はなしがたし。

日七十二月七

頑固獨斷それ危し

○明治元年……明治天皇御即位の大禮を行はせらる

○大正九年……小額紙幣發行法を公布す

豊臣秀吉、或る時人に謂つて曰く、世の中を視るに、君臣朋友の間にて、皆我まゝなる所より不和となれり。我好むところは人の好まざるものなり。家來とても同じく厭がること多し。將たる者、此處に心を付け、我にひとしき近士を選び、密かに我身の目付に頼みおき、時々異見を承はりて、我行の善惡を聞き、萬事に心を付くこと、將たる者の第一の要務なり。此心得なければ我身の過失知れずして、次第に過失廣くなり、諸人に疎まれ、家を亡し、身を失ふものなりと。頑固獨斷の人に取つて此言は將に頂門の一針といはなければならぬ。何人も平素この心掛さへあらば、頑固に陥らず、獨斷にも陥らないであらう。君子は他の苦言を入れて過ちあれば自らこれを改むるに吝かでないが、愚人は只人の善言のみを善ぶ。雲泥の差ある所以である。

日八十二月七

必要は發明の母である

○明治三年……獨佛交戦に對し我國中立を布告す

○昭和二年……今上天皇小笠原島に行幸あらせらる

西洋の諺に「必要は發明の母」といふことがある。困つた擧句必要に迫らるれば、人は何とかして必要に應ずる丈の工夫をする。工夫をすれば又相當の方法が案出されるものである。金がない、書籍がないといつて落膽して仕舞へばそのまゝであるが、苟くもその境遇にあつて工夫さへすれば、方法は幾らでも立つ。又其位の工夫をするのが何よりの學問で、學問の進歩は必ずしも順調に乗じて進むものみの専有する所でない。苦しみに苦んで、磨き出したところに、光も加はり効も擧るものである。金がない爲に志を立てられぬといふ人に對しては、金のないのは却て幸である、自ら工夫鍊磨する機會を受くるものなりといひ度い。志を立てるのも亦同じことで資力の缺乏に打克てば夫だけ志を強くする。毫も落膽するには及ばない。

—(新渡戸稻造「修養」より)—

日九十二月七

自分の意志を自脈で計れ

○寛文七年……江戸府内に門松を禁止す
○明治三十三年……國際平和條約に調印す

砂原や埋立地のまだよく固まらぬ所などへ、三階四階の大きな建物を築きあげることに骨折損であるが如く、意思の薄弱な、張の弱い、熱のない、ぬらりくらりとした人間には何を教へても駄目、何事を修行させても無駄、馬の耳に念佛、燒石に水、豆腐にかすがい、糖に釘、暖簾に向つて腕押を誡み、底のぬけた釣瓶で井戸替の手傳をはじめるやうなもので、骨折損の草臥儲け、何の甲斐もないことだ。それ故苟くも凡人以上の人間にならう、なりたいと思ふ當人はいふまでもなく、ならせてやりたいと思ふ教育者みづからも、是非先づ一通り其の當人の意志の強弱を検査せねばならぬ。而してこれは必ずしも他人に檢て貰ふまでもなく、少しく反省すれば自分でもよく知れる。所謂「自脈」でわかるのだ。

—(坪内逍遙「通俗倫理談」より)—

日十三月七

満足慢心立往生

○明治四十五年……明治天皇崩御あらせらる
○大正元年……明治を大正と改元さる

「ア、おれはいけない、意志が弱い、意氣地なしだ」と自分で思つたからとて、何もあわてゝ失望し絶望するには及ばぬ。何となれば、さう氣がついたのが取りも直さず心を入れ替へる緒で、天の助けだ。凡そ此の世の中で最も懼れむべき廢物は、意志薄弱の生得でありながら、其の薄志たることに心づかず、見事人並の積りで自惚れてゐる手合である。そもく自惚は慢心のもと、是れでもう澤山だといふ根性、即ち満足、安心、立往生、立腐れのはじまりで、いつまで経つたとて先へ進みつこが無いゆゑ、退歩するばかりだ。「ア、おれはいけない、意志が弱い」と心付いたなら、それが即ち天の賜である。奮つて其の意氣地の無い心に打克たうといふ精神さへ振ひ起さうものなら、そこに忽然として強い意志が成立つやうになる。精神一到何事か成らざらんだ。 —(同前)—

日一十三月七

己れの弱點を矯正せよ

○明治四十一年……陸軍肩章を定む

○大正元年……大統繼承の勅語を下し給ふ

克己を修養するには、最初より大事を目的としてむつかしいことを選ぶはよくないと思ふ。却てそれは成功しないで失敗の原因となるからである。毎日出逢ふことで、少しの心がけで出来る位のことより始めるがよい。其の方法として二三の實例を挙げると、第一は朝起の習慣だ。朝寝の人が早起をすることも克己の一步であらう。第二は弱點の矯正だ。毎日自分の弱點を反省してその矯正に力める。自分の弱點表を作つて成績點をつけて行くがよい。第三はもし性急の人であれば、時を定めてゆつたりとする習慣をつける。又反對に餘りゆつたりし過ぎる人なら物事をちやんちやんと一定の短い時間で處理する習慣をつける。第四は憎惡の矯正、是も平生注意すれば矯正される。第五は憤怒の抑制、むらむらと怒がこみあげた時に、ちつとこらへてその怒を胸の中で喰ひとめることだ。

日一月八

大名の煽がれながら暑さかな

○明治六年……第一國立銀行を開業す

○明治二十七年……清國に對し宣戰の詔勅下る

大名の煽がれながら暑さかな——如何に大名と雖も貴族と雖も、天帝の炎熱を如何ともし難い。煽風器も氷柱も乃至は冷房装置も避暑行も畢竟一時凌ぎに過ぎぬ。吹く風のいつしか死して樹影動かす、萬籟寂として釜中に煮らるゝ如き夜中、輾轉反側、遂に眠り難きは彼等にも經驗があることであらう。然しながら、アスファルト舗道を溶かす百度の炎天に働く人、或は工場の火夫、炭坑の坑夫、家に歸つても小窓一つない我家にあへがねばならぬ人の如何に多い事か。けれどもそこには夕顔棚の下涼み、驟雨一過、忽ちにして山更に青く、清風徐ろに、僅かばかりの木立を拂つて、水の如く澄み渡れる大空には燦然たる星光きらめき、やがて一團の明月、屋根を照して、一日の勞苦を洗ひ去る、よくぞ男に生れたるの感ことに深きものはその人々であらう。死中茲に活ありといはうか。

心頭を滅却すれば火も亦寒し

○明治十四年……大學の學生を學生と稱呼す
○大正七年……シベリヤ出兵を宣言す

暑を忍ぶもの未だ必ずしも苦と謂ふべからず、暑を避くる人未だ必ずしも樂と稱すべからず、苦中樂なきに非ず、樂中しばしば苦あるを見る。心頭を滅却すれば火もまた寒し、苦樂畢竟相隣りする。苦樂の根源を徹證する時は、苦樂共にこれ樂、苦樂の枝葉に拘泥すれば、苦樂共に苦である。こゝに人生向上修養の必要があり、身心鍛錬の妙味がある。昔、唐の白居易は、頗る禪旨に通じたが、曾て苦熱の日、恒寂禪師の禪房に題して曰く、
人々 避レ暑 走 如レ狂
獨 有 禪 師 不 出 禪 房
但 能 心 靜 即 身 涼
可 是 禪 房 無 二 熱 到 一
何ぞ以て煩暑を消せん、端居一院の中、眼前長物無く、窓下に清風有り、熱散じて心靜なるに由り涼 生じて室空し、此時身自得すれば更に人と同じ難しと。

自ら額に汗する者は幸なり

○承應元年……佐倉宗吾刑死す
○大正三年……バナマ運河開通す(一九一四年)

汗の力、汗の價値をよく知る人は尊い。人間の汗によつて、田も耕され金銀も掘出され、海幸も得られ、山幸も得られる。汗のあるところ、人間の事業があり、汗なきところには、只驕樂と墮落とがあるのみである。單にこれを人間の身體のみについて言ふも、醫者よ、藥よ、衛生よと騒ぐよりも唯日々汗を出す工夫をするがよい。毎日汗さへ出せば、人間決して病魔に犯さるゝことはない。この點に於て、額に汗して致々として働く労働者は、知ず識らずの間に、天の恵に浴してゐるわけである。肉體的な勞働に従事する者でなくとも、自ら力めて汗を出すことを工夫しなければならぬ。種々の運動、體育、皆ここに歸する。散歩も只そぞろ歩きでは効果がない。汗の出る程疾歩するに如くはない。平地を歩くよりも嶮路を歩くがよい。嶮路を四五丁も歩けば、必ず汗が出る。

戰場に暑中休暇はない

○寛永十年……譜代大名の妻子を江戸に居らしむ
○大正三年……英佛兩國獨逸に宣戰す（一九一四年）

日露戰爭中のことである。或る大臣が明治天皇の御前に伺候して、暑中休暇の事を奏請した。その時、天皇は大臣をおかへり見あらせられて、「滿洲に戦つてゐる軍人等には、暑中休暇はないであらうな」と仰せられた。その大臣は恐懼して御前を退いたといふ。御製の中に、

いくさ人いかなる野邊にあかすらむ蚊の聲しけくなれるこの夜を

蚊の群れ鳴くのを聞きし召されても、直ちに軍人の上を思ひやらせ給ふほど、御心を軍隊の上におかせ給ふたのである。さうしてまたその戰場にあへなくも還らぬ人となつた將兵と、その親たちの心にまで衷悼と同情の御心を御傾け遊ばされたのである。

國のためたふれし人を惜むにもおもふは親のこゝろなりけり

議論と暴行は別問題である

○元治元年……英佛米蘭聯合艦隊下關を砲撃す
○明治十五年……戒嚴令を制定す

極めて冷静なる科擧者と、極めて熱情的な政治家とが、或る一つの問題に就いて議論をした。科擧者は科擧的に政治家の議論を反駁するが、政治家は中々その反駁に屈しない。顔を熱し、両手を振つて、口角泡を飛ばした。「君は科擧の假面を被つて、詭辯を弄するものだ、我輩は確固たる信念を以て飽くまで自説を主張する。これでも解らないのか」と叫び様、思はず立ち上つて、無意識のうちに机の前にあつたコップを引つ摺むと、矢庭にそれを叩きつけた。コップは微塵に破れて四邊に散亂した。その時科擧者は靜かに言つた。「此の問題とコップを叩き破ることとは、全く別個の問題です」と。往々にして人は此の政治家の如く、全く當面の問題とは無關係な「別問題」を演ずることがある。事に當つて熱を持つことはいゝ。然し問題の中心を衝くには飽迄冷静沈着でなければならぬ。

日 六 月 八

人間萬事塞翁が馬

○大正七年……富山縣に米騒動起り全國に擴大す

○昭和二年……今上天皇奄美大島に行幸あらせらる

人間萬事塞翁が馬——といふ諺は人口に膾炙してゐる文句である。昔、塞上に近いところに老人があつて其人の馬がいつの間にか逃げ失せて了つた。近所の人達はお氣の毒なことをしたといつて慰めたけれども、老人は別に惜しいやうな顔もしなかつた。數ヶ月経つと、その馬が偶然戻つて來た。見れば別に一頭立派な馬を伴れて來てゐる。そこで近所の人達はこれは又素晴らしい幸福だといつて喜んだが、老人は別に嬉しうな顔もしなかつた。老人の息子は乗馬が好きで件の驕馬を乗り廻してゐたが過つて落馬し、背骨を打つて不具になつた。すると今度は隣國との争ひが起つて敵兵が攻寄せて來たので、塞では壯丁を進めて防禦に努めたけれども、多くは戦死して了つた。只老人の子は不具であつたために戦に出ず、父母と共に命を永へたといふのである。

日 七 月 八

病却て身を保の元となる

○天保二年……十返舎一九段、年六十八

○昭和四年……獨逸ツエツペリン伯號世界一周に發航す(一九二九年)

禍と幸福とは常に互に廻轉し、然も辛いと思ふことが樂となつたり禍と見えたことが却て幸福となることもある。されば『菜根譚』の中にも「子生れて母危く、鐵積んで盜窺ふ。何の喜びか憂に非ざる。貧以て用を節すべく、病以て身を保つべし、何の憂か喜に非ざる。故に達人は常に順逆一視し、しかも欣戚兩つながら忘るべし」と説いてある。道に達すれば順境も逆境も畢竟同一であつて、喜びも憂も二つながら忘れ去るといふのであるが、凡庸では中々その悟は得られない。只逆境に處して人を怨まず天を怨まず、禍を轉じて福をなす丈けの、平素の修養が肝要である。逆境も之を善用すれば順境に達する手段とすることが出来る。樂あれば苦あり、苦あつて初めて樂が得られる。その苦を克服して天を樂み、命を保んずるは即ち修養の賜である。

日八月八

他の短を擧げ己の長を表すなかれ

○元和二年……天主教を禁止し外國船の長崎以外に入るを禁ず
○明治二十二年……日露改正條約調印成る

- 一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず、總て物の命とること勿れ
- 一、衣類器財相應なるべし、過ぎたるはよろしからず、足らざるは惡し
- 一、好んで酒を飲むべからず、饗應により國辭し難くとも、微にして止むべし
- 一、他の短を擧げ、己が長をあらはすこと勿れ、人を誇りて己れに誇るは甚だいやしきことなり

- 一、主あるものは一枝一草も取るべからず、山川江澤にも主ありと知るべし
- 一、一字の師恩たりとも忘るゝことなかれ、一句の理をだに解せず、人の師となることなかれ、人に教ふるは、己れを爲して後の事なり
- 一、忠以て己れを盡し、恕以て人を俟つ

—(松尾芭蕉箴言)—

日九月八

寧ろ運命を支配せよ

○昭和八年……初めて關東防空演習を行ふ
○昭和十一年……孫基禎オリンピックのマラソンに優勝す

人として身を立つるを欲せざるなし、而して立つ能はざるものあるは何ぞや。人の運命に支配せらるゝは、猶ほ船の風潮に支配せらるゝが如し然も善良なる舟師は、却て風潮を支配して、航海の便宜に使役す。人として運命を支配する能はざらん乎。縦令惡運虐命たるも、之を轉じて好運順命たらしむる能はざらんや。吾人は立身の道あるを知る。未だ其の難きを見ず。何をか立身の道と云ふ。自主の猛志是れのみ。自助の堅行是れのみ。約して言へば、自個の手腕を以て、自個の世界を作爲することは是れのみ。人の世に在るは、戰場に在るなり。勝たずんば負け、進まずんば退く。瞬間と雖も油斷すべからず。而して此の世に處して手を袖にし、以て僥倖の來るを待つ。是れ到底來る可からざるを待つなり。

—(徳富蘇峰「處世小訓」より)—

總ての嗜好に向つて淡泊なれ

○元祿六年……井原西鶴歿す、年五十二

○明治三十八年……日露講和會議をポーツマスに開く

立身の要訣の第一は精力を一方に集注傾倒する也。苟も然かすれば、斧を磨して針と爲すことも得可し。山を銜んで海を填むることをも難からず。世には萬事に通じて、一事をも爲さざる人あり。百能あつて一藝なき人あり。精力を凝結する能はざるは、畢竟猛志堅行なきの證據に外ならず。第二は總ての嗜好に向つて淡泊なることなり。所謂淡泊ならざれば以て志を明にする能はずとは、千古の金言なり。それ唯淡泊なり。故に其の精力を分散徒費せざるを得るなり。無慾ならざれば大事を爲す能はず。第三は躁急なる可からず。待つことあるを知らざる者は、爲す能はず。事の成るや自然の順序あり。機の熟するや正當なる發育を要す。志す所は彼に在つて、爲す所は此に在り。天下唯だ靜寧修默の人、能く其の志を達するなり。

—(徳富蘇峰「處世小訓」より)—

自個の手腕を以て自己の世界を作為せよ

○寛永五年……天然徳兵衛印度より長崎に歸着す

○文政六年……シーボルト長崎に来る

立身の要訣の第四は理想に生活するを要す。樹に向つて射るよりも、月に向つて射る者の高遠に達するは自然の理なり。第五は慷慨の志を存養せよ。慷慨の志とは、湯仰心の發熱したるを謂ふ。惻然として中に動く所あり。矍然として外に感ずる所あり。中心恰も噴火山の如く、炎々として騰上するを禁ずる能はざるものあるなり。唯だ此の志あり、自から感激して此に意味ある生活を爲すを得るなり。苟も此の五の要件に於て缺くる所なく、而して能く自個の手腕を以て自個の世界を作為せば必ず其の天分に應じて得る所のものあらむ。乃ち得たる所を以て立身出世とは云ふなり。得たる所に安するを以て、安心立命とは云ふなり。此の如くにして生活するを以て、意味ある生活とは云ふ也。吾人が立身の法の平凡にして庸俗なる近時才人の唾棄する所たるを免れず。(同前)

軍旗ひらめく處君が代の喇叭響く

○明治二十六年……文部省始めて君ケ代を制定す
○昭和十年……軍務局長永田鐵山遭難す

遙かに左翼の方に當つて、喇叭たる君ケ代の吹奏が聞えた。君ケ代のラッパの聲は、恰も、陛下御身親から「前へ！」と號令せらるゝ如くに感ぜられて、將卒は皆自然に身を引きしめた。勇氣更に十倍し、忽ち奮躍、彈雨を犯し、岩石を攀ちて猛進し、大喊聲を放ちつゝ敵壘に突入した。眞黒に固つた一團の先に立つた松村少佐は「突き込め」と怒眼叱咤した。君ケ代の吹奏はなほ盛んに起つた。山上には劍尖相摩して火花を散らし、接戦格闘、打ち込む大刀に鮮血の河を流し、伏屍の山を築き、慘は慘なりしかど、窮苦の餘始めて敵を破つた。我等の愉快の情はいかばかりなりしぞ。かくて接戦格闘をつゞけた我等は益々勇を鼓して奮闘し遂に我軍は確實に太白山一帯の高地を占領した。軍旗はヒラヒラと陣頭に翻り、萬歳の聲は潮の如くに湧いた。——(櫻井忠温「肉弾」より)——

金錢を死藏するは瓦を貯ふるに同じ

○享保元年……徳川吉宗八代將軍となる
○明治三十一年……米國フイリピンを占領す

昔ある守錢奴が、命から二番目の大切な金錢を庭の隅に埋めて置いた。さうして朝夕こつそり見に行つては「ある〜」と喜んでゐた。一人の下男がこれを不審に思つて、或る日主人にかくれて、様子を見てゐたら、その正體がわかつたので、夜中ひそかに行つて件の金錢を堀り出し、まんまと盗んで出奔して了つた。さうとは知らず、翌朝例の如く守錢奴が見に行つたら、昨夜までたしかにあつた金錢が見つからぬ。泣くやらわめくやら大騒ぎをしてゐるので、隣の人がそのわけを聞くと、仕方なく事情を打開けた。隣人はあつさり笑つて「お前さんにいゝ事を教へてあげよう。今日からその穴に瓦を埋めて、それを金塊だと思つて眺めなさい。藏つて置くだけなら、瓦だつて金塊だつて同じでせう」といつた。貯めた金は巧みにこれを使はねば役に立たぬ。

日四十月八

満身これ日本魂

○文化九年……高田屋嘉兵衛露艦に捕へらる

○明治三十三年……聯合軍北京に入り公使館居留民を救助す

日支事變に於て數次の南京空爆に勇猛無比なる活動をつづけた我が海軍航空隊の中で、梅林中尉は、第一次、第二次の空襲にその豪膽振りを遺憾なく發揮した。この兩次の空襲は共に密雲低く垂れ、視界殆ど無く、荒天のため、極度の低空飛行を行つて、敵の防空砲火の集中炸裂する中に、前後六回の連続爆撃を決定した。此の時不幸にも梅林機は敵弾を受けてエンジンが燃え上り、機首は下降して了ひ、萬策盡きて僚機の果敢な活躍に袂別する時が來たのを知つた。梅林中尉は、今はこれまでと、火焰に包まれて墜落し行く愛機の中で、僚友達の安全と僚機の活躍を祈りつゝハンカチーフを打ち振りながら永久の別れを告げつゝ敵中に落下して行つたのである。この壯烈鬼神をも泣かしめる空の決別を知つた僚友達は、痛烈な感激と共に、一層猛然として復讐戦に奮闘した。

日五十月八

この母にしてこの子あり

○文化五年……英艦フイロン號長崎に侵入す

○明治三年……蝦夷を北海道と改稱す

これも日支事變に於て海軍航空隊附の山内中尉が敵地空襲中機と共に墜落名譽の戦死を遂げた時、その母ヤス子は海軍省に一書を寄せ母としての衷情を披瀝した。「この母にしてこの子あり」と言々句々讀むものをして感泣惜く亂はさらしめた。

海軍旗のもとにはせ參り候時、すでにこの最後を明かに決意仕り居りたるものにこれあり候。天皇陛下萬歲、大日本帝國萬歲、大日本海軍萬歲、戦死せる子達雄に代り母ヤス謹みてとなへ奉る。
あゝ、老いゆく母、月の明るきをながめては泣かんとするか、花の香はしきを含めては惱まんとするや。あらず。
首をあげて空ゆく飛行機を見よ。あれよあの機、達雄永へに生きて在るよ。

日六十月八

聖旨に答へて時難を克服せよ

○大正三年……ドイツに對し最後の通牒を發す
○大正八年……板垣退助歿す、年八十三

なくさめむことの葉もかなたゝかひのにはをしのひてすくすやからを
畏くも皇后陛下に於かせられては、支那事變勃發以來、皇軍の上に大御
心を注がせられ、或は御手づから繻帶を御巻き遊ばされ、戦傷者には義眼義肢を
御下賜あらせられるなど、恐懼感激の至りに堪へないところであるが、更に應召
將兵家族の身の上と、一般銃後を守る國民の上にも思ひを垂れさせられ「慰めむ
言の葉もかな」と、此の御歌に仰せされたのである。謹んで御歌の御心を拜しま
つるに、銃後に在つて家を守る父母、子を抱いて戦線の夫を思ふ妻、夜となく晝
となく、暑さにも寒さにも、思ひを戦地に走せ、心を痛むる人々のことを思へば
何といつて慰めてやつていゝか、その言葉さへないと限りなき御同情である。吾
等國民は共に此御歌を拜し、更に時難の克服に奮起せねばならぬ。

日七十月八

内に省みて疚しき處あれば憂ふ

○治承四年……源頼朝伊豆に兵を擧ぐ
○明治二十二年……始めて新聞紙面に寫眞銅版を用ふ

君子は泰然自若として決して物に動することなき人格者であらねばなら
ぬ。論語に「君子は憂へず恐れず、内に省みてやましからず」とあるの
は即ちこの道理を明白にするものである。然るに方今所謂紳士を以て任ずる者
やゝもすれば憂患の念絶えず、恐怖動搖の心切りなるものがあるやうに思はれる
内に省みて毫も疚しき所がないならば、決して徒らに悲觀したり、煩惱したりす
る筈はない。事に當つて急がず焦らず、而して亦何の遠算もなく、直情経行した
ならば、畏怖逡巡すべき理はない。然るに尙且憂患の念絶えず悲觀失望の心
去らざるは、必ずその人に最善の努力が盡されて居らぬものと思はれる。従つて
「人事を盡して天命を待つ」といふ悠然たる態度になれないものと思はれる。飽
くまでも憂へず、恐れざるが紳士たる一資格である。

— (濫澤榮一) —

日八十月八

物事に退屈するな

○慶長三年……豊臣秀吉薨ず、年六十三

○明治四年……鎮臺を東京大阪に置く

豊臣秀吉は、自ら警める言葉として次のやうにいつた。いかにも秀吉らしい簡素なものである。第一、慾をはなるべし。第二、女に心をゆるすな。第三、人と物あらそうな。第四、朝寝するな。第五、何事も人なみになれ。第六、身の行末つゝしむべし。第七、何事もつく／＼物ひげすな。第八、物にたいくつすな。と、先づ第一に慾を放るべしといつたのは、物事慾を先にしては成功おぼつかない、利権損徳を放れて、誠心誠意事を處すべしといふのである。第二女に心をゆるすなといつたことも、卒直な金言である。昔から「七人の子はなすとも女に心を許すな」といつてある。とかく油断のならないものである。彼のやうな並々ならぬ人物でありながら「人と物争うな」とか「何事も人なみになれ」と云つて、自らを戒めてゐるところに却て彼の偉大さが認められる。

日九十月八

後輩の中にも先輩がある

○大正二年……世界平和會議をヘーグに開く

○昭和四年……ツエツペリン伯爵東京に来る

先輩、後輩といふ區別は、元より一般には年長と年少との區別、或は學識、經驗に於て一日の長ある者と然らざる者との區別である。「年の功より繩の甲」といつて年功を経たものは何といつても兎に角年少者よりは閱歷經驗に富んで居るべきは當然のことである。けれども單に甲と乙と、生年月の偶然なる前後の結果のみを以て、必ずしも後輩と先輩の區別が立ち難き場合がある。その人の經驗にも深淺があり、廣狹がある。經驗とは單に偶然なる經過であつてはならない。その體験を吟味し検討し自家掌中のものにしてこそ初めて意義がある。ただぼんやりと素通りした丈けのことでは決して身についてゐない。學問とても其の通りである。年少者、後輩と雖も深く其の經驗を吟味すれば先輩を凌ぐことも出来る。後輩の中にも先輩あることを知らねばならぬ。

日十二月八

少し懲して大いに戒めよ

○明治三十六年……日本法律學校を日本大學と改稱す

○大正七年……元帥刀を制定す

人中にて我に無禮を行ひ悪口する者あらば、恥辱にならざる事は聞かざるふりして堪忍すべし。されど彼の者それをわきまへず、我を辱しめたりとて、ほこり顔にて我をあなどり、後日又われを辱しむべきうれひを思はゞ、人なき所に招きてとがむべし。もし人中にて悪口すること二度に及ぶとも怒るべからず。道理を云ひきかすべし。道理に服せずば、聲をはげまして咎むべし。此方よりは悪口すべからず。かやうに遠慮なく人をあなどり悪口する者は愚かにして後のわざはひを慮らず、必ず臆病なるうつゝなきしれ者なれば、此方より強く咎むれば、必ず閉口するものなり。されど我が方よりは人を侮りて悪口すべからず。悪口すれば如何なる臆病者も亦怒を起して戦ひに及ぶ事あり。妄人と戦ひ勝ちても、我も亦自殺せずんばあるべからず。 — (貝原益軒「文武訓」より)

日一十二月八

強敵來るも我怖れず

○文久二年……生麥事件のことあり

○昭和五年……東京大阪間に電送寫眞を開始す

筑海の颯氣天に連つて黒し、海を蔽うて來る者は何の賊ぞ。

蒙古來る、北より來る、東西次第に吞食を期す。

趙家の老寡婦を嚇し得て、これを以て來り擬す男兒の國。

相模太郎膽甕の如く、防海の將士人各々力む。

蒙古來る、吾は怖れず。

吾は怖る關東の令山の如きを。

直前賊を斬つて顧みるを許さず。

吾が檣を倒し、虜艦に登り、虜將を擒にして吾軍喊す。

恨む可し東風一驅大濤に附し、羶血をして盡く日本刀を膏さしめざりしを。

— (頼山陽「蒙古來」) —

自治心なき國民は弱し

○明治三十六年……電車始めて新橋品川間に運轉す
○明治四十三年……日韓合併條約成る

自治心の要は、我が分内の事は他の強制や勧誘を俟たず、又た他の援助や示導を仰がず我自ら我事を行ふにある。一國の弱きは、其の要素たる國民の弱きがため。而して其の國民の弱きは、彼等が自治心なきため。言ひ換ふれば天を怨み、人を咎め、苦めば自暴自棄し、困すれば他人に向つて救護を叫ぶ斯る腑甲斐なき國民の集合では、幾億ありとも、決して頼みとすべきではない。ただ自ら我事を做して他人の厄介にならぬは、立憲政治下の國民として、纔に小乗的教養に止まる。此れを一步踏み出し、進んで我自ら公共團體の一員たるを自覺し、その自覺心によつて我自ら公共團體のために貢献し、奉仕し、時としては我自らの利益さへも、これを抛つて顧みざるに至る。此の如くして始めて、憲政的教化の大乘に達し得たものと云はねばならぬ。——(徳富蘇峰「國民小訓」より)——

忠烈赫々として白日の如し

○明治十一年……竹橋騒動起る
○大正三年……對獨宣戰の勅書下る

明治元年戊辰の役、會津藩の士弟十六人、白虎隊の一隊は、八月二十三日、藩主の命を奉じて戸口原に血戦したが、時利あらず、戦敗れ、萬難を冒して會津の城に還らうとしたけれども、道は塞がつて入ることが出来ない己むなく飯盛山に登つて見ると、既に城下は烟と焰につままれ、城の天主閣は焼け落ちてしまつてゐた。白虎隊の一同は我が事畢んぬと心を定め、跪いて城閣を拜し、皆時に年十七歳にして、忠烈なる死を遂げた。その壯烈を讃歎した「白虎隊」の詩に、腹背皆敵將に何くにか行かん、劍に杖つて間行し丘岳に攀づ、南に鶴城を望めば砲煙颯る、痛哭涙を飲み且つ彷徨す、宗社亡び我が事畢ると、十有六人屠腹して僵る、俯仰此に十有七年、之を畫にし之を文にして世間に傳ふ、忠烈赫々として白日の如く、壓倒す田横麾下の賢と謳つたのは即ちこれである。

模倣を自慢するは恥辱である

○明治元年……會津白虎隊士飯盛山に自刃す

○昭和六年……米國飛行家リンドパーク太平洋を横斷す

日本人は模倣の上手な、猿のやうに器用な國民である——といふ言葉は嘗ては過去の日本を、今日の文明にまで導く上に於て遺憾ながら甘んじて受けなければならぬ言葉であつた。けれども、昭和の今日、新興躍進の國民として、いつまでも此の言葉に甘んじ、安んじ、或は自慢すべきことではない。寧ろそれは大いに恥しいことである。模倣が上手だといはれる半面には、獨創力がないといふことを指摘されてゐることがある。それを自慢したり得意がつたりすることは、取りも直さず、自らの獨創力に乏しいことを自慢したり得意がつたりすると同じ事になるのである。畏くも、今上陛下御即位の當初、下しおかれた御勅語にも、獨創の重んずべきことを示されてある如く、昭和聖代の國民としては先づ何よりも科學的獨創の精神と實力とを涵養充實することが急務である。

天にひれふし地にひれふす

○天文十二年……ホルトガル船種ヶ島に鐵砲を傳來す

○明治三十六年……明治法律學校を明治大學と改稱す

中江藤樹は、我が國陽明學の泰斗で、またその實踐者であつた。德行頗る厚く、世に近江聖人と仰がれた。十二歳の時、一日食膳に向つてゐた藤樹は、傍らの者を顧みて泌々と云つた「自分自身では一粒の米を耕さず、かうして何不自由なく食事を興へられてゐるのは、父母や祖父母や主君や天子様の御蔭である。一日もこの御恩を忘れることは出来ない」と。彼の思想はこゝに根ざしてゐる。即ち忠孝一本の思想に終始した。藤樹は行住坐臥、如何なる場合でも人に道を説くことを忘れなかつた。駕籠の中では駕籠舁きに道を説いた。或る時道中で追剝に出會つた。「金が無くば着物を脱げそれがいやなら命を貰う」と迫られて藤樹は、「着物はやれぬ、勝負をしよう」と立直つて名を名乗つたら、賊はあつと云つて平伏してしまつた。彼の名はかうい人間にまで響いてゐた。

社會共存の一員たることを忘るな

○明治二十七年……日韓攻守同盟條約成る

○昭和六年……濱口雄幸歿す、年六十二

群集の中にあつて、その群集を認めず、宛も自分一個、我家の一室中にあるかの如く心得、傍若無人の振舞を爲す者は、如何にも淺ましき野蠻人と云はねばならぬ。彼等には我儘はあるが自治心はない。自治心の本諦は我身を時と場所とに應じて、其宜しきを爲すにある。群衆中に處しては、其の一人らしく行動するが、自治心の發作である。自ら治むるがために、他に迷惑をかけても顧みず、自ら治むるがために他に損害を興へても頓着せずといふが如きは、是れ自治心でなくして、自儘心である。自治でなくして他害である。凡そ公共心の發動するは、決して一國の大政の上のみではない。一村に於いても一町に於いても若くは向ふ三軒兩隣に於て、或は汽車の中、電車の中、苟も二人以上の群集する所、必ず公共心の試煉所たらざるはない。 — (徳富蘇峰「國民小訓」より) —

常に公共の利害を念とせよ

○正徳四年……貝原益軒歿す、年八十五

○大正三年……日澳兩國の國交斷絶す

我が敢爲、勇往なる日本國民は、不幸にして自治心の教養が缺乏してゐる。其の必然の結果として、公共心に至つては頗る缺乏してゐる。所謂上流社會より一般に通じて、吾人はあらゆる群集の中に、多數の各個人を見出すも、未だ所謂一團の群集なるものを見出さぬ。彼等は十人でも百人でも、只個々別々の十であり百である。其の極、互に睨み合ひとなり、妨害の原動及び反動となる。故に身を群集の中に投ずるは、宛も人をして敵中に入るの感あらしめる。若し夫れ所謂公共心ある者は、互に相集れば、たちまち一和し、たちまち一和すれば、たちまち自他の利害を、其の團體の利害の中に没投して、互ひに申し合する迄もなく、相競うて其の團體のために、害を去り、利を致すの努力を事とする。一教養此に到つて始めて立憲國民の資格を具備する。 — (同前) —

日八十二月八

働け働け徹頭徹尾

○明治二十一年……海軍大學校を東京築地に設く

○明治三十六年……和佛法律學校を法政大學と改稱す

働け働け萬事は徹頭徹尾の一語に盡く。

怒るとき書いた手紙は直ぐ火中に投ぜよ。

飲酒を始めざれば醜漢とならず。

高く射る勿れ、低きを望まば萬人次第に之を了解すべし。

如何なる事ありとも敵味方に對して信義を守るべし、正しき場所に足を立つれば

直立することを得べし。

黄金は可し、然れども勇と膽勇と愛國心とに富める人はそれよりも更に可し。

相會して直談するは悪感情を一掃する最上の方法なり。

正義は萬事なり、正義と信すれば躊躇すること勿れ。

—(リンカーン座右銘)—

日九十二月八

時鳥々々として明けにけり

○明治三十八年……日露講和談判成立す

○明治四十三年……韓國合併の詔書煥發さる

加賀の千代女は、十七歳の時、芭蕉門下の支考にその天才を見出されたが、支考歿後には弟子の蘆元坊里紅に師事した。里紅が諸國行脚の途次

加賀に行くと、千代女が訪ねて来て教を乞うた。里紅は寢床の中に旅の疲れを休めながら「時鳥」といふ題を興へた。千代女は早速數句を作つて里紅に示した。

里紅も心中その天才に感じたが、口ではわざと「まだ駄目だ」とはねつけた。千代女は又即座に數句を作つて見せた。それでも里紅は「よろしい」と言はない。

そのうち、ぐつすり眠つてしまつた里紅が、明け方ふと目を覺すと、千代女は相變らず枕許に坐つて一心不亂に句を案じてゐた。里紅が靜かに「もう夜が明まし

たかな」と訊ねると、千代女は返事の代りに「時鳥ほととぎすとして明けにけり」と答へた。里紅はハタと手を拍つて初めて千代女の並々ならぬ努力をほめた。

身を挺して死地に進め

○大正六年……物價調節を公布す
○昭和二年……山東派遣軍を撤退す

橋中佐は人格高潔な軍人であつた。日清戦争當時には東宮武官として精勵してゐたために、出征することが出来なかつたが、日露戦争の時は、歩兵第三十四聯隊の第一大隊長として第二軍の前衛を率ゐて奮戦した。「初陣の光榮何ものか之れに加ふるあらんや、予は死生固より口にする所にあらずと雖も、心竊かに期するところあり」と其日記に認めてある。八月三十日首山堡高地攻撃の命は下つた。明くる三十一日『軍神 橋中佐の歌』にもある如く、三軍の意氣天を衝いて、正義の刃向ふ敵はなかつたが、敵前凡そ三百メートルに達した頃、突如敵は、小銃と機關砲との亂射を浴せられ、面を向けることさへも出来なかつた。隊長怒髪天を衝き、一聲高く「突撃！」と叫んだ。此時一發の砲弾は中佐の身邊に炸裂し、その破片は腰部を打ち碎き遂に名譽の戦死をとげた。

忠烈武人の譽は高し

○明治十二年……大正天皇御降誕あらせらる
○明治三十七年……日露戦役に橋大佐戦死す

是より曩に大隊長は寵愛しつる従卒の伊藤金次郎に命ずらく、此曉に吶喊の聲ある後に銃聲の絶ゆるを聞かば勝利なり、直ちに馬を引來れ、我は追撃に移るべし。若し銃聲絶えざれば、我が戦死の時なるぞ、汝よくよく心得て、我が屍を持ち歸れと、云ひつけられて従卒が、戦況如何にと窺ふに、山も崩れん吶喊の聲は頻りに聞ゆれど、銃聲更に絶えざれば、氣も魂も身に添はず、走せ付け見れば、こは如何に、大隊長は軍曹の背に負はれて淋漓たる血汐に染みてありければ、目には涙の玉露、たばしる如く飛び附きて、大隊長を己の背に、移しかへつゝ泣くも、味方の陣にぞ歸りける。呼嘗て東宮殿下の御側に、仕へまつりし雄將も、數ヶ所の庇に堪へ兼ねて、首山堡頭の對露と、消えはしつれど橋の香は長く遼陽の空より高く匂ふなり、空より高く匂ふなり。

ゆるむ心のねぢを捲け

○大正十二年……此の日午前十一時五十八分關東大震災起る
○昭和五年……東京本所被服廠跡に震災記念堂成る

大正十二年九月一日午前十一時五十八分！あゝその日は、獨り東京市民
或は關東地方住民のみならず、全日本國民に取つて、何といふ惡日であ
つたらう。幾萬の人命と、幾十萬の財寶とは一朝にして灰燼に歸し、一國の文化
又暫くは脅かされつゞけたのである。その苦難と窮乏の現實も、時と共に遙かな
る歴史の幕に隠されて行く。諺にも喉元過ぎれば熱さを忘れるといふ。さりなが
ら、それは忘れ去るべく餘りに痛烈なる體驗であつた。今日、世界第五位の面積
と、世界第二位の人口とを擁する大東京の姿を眺める時、慘鼻を極めた地樹繪
さながらの痕跡は、想像だも及ばないのである。と同時に、この九月一日といふ
日を今こゝに迎へても、人の心はゆるみ勝になり易い。常にその日を顧み、そし
て靜かに黙禱して、やゝもすればゆるまんとする己が心に反省のねぢを捲かう。

努力の前に困難なし

○明治三十五年……東京専門學校を早稻田大學と改稱す
○大正二年……非常徴發令を公布す

獨力を以て一切經の翻刻を成功した鐵眼は、本姓を佐伯道光といひ、肥
後益城郡の人である。幼少より聰明であつたが、のちに隱元禪師に業を
受け、一山の尊敬を受くるに到つた。夙に鐵眼は我が國に未だ一切經の出版され
てゐないのを遺憾に思ひ、大願を起して自から四方に勸化せんと決心した。けれ
ど貧困のため托鉢さへも持たない有様で、止むなく笊に紙を貼つて鐵鉢の代りと
し、寒暑を厭はず、遠近を問はず、毎日熱心に諸方を勸化した。其結果、大分集
つたが、丁度其時大饑饉があつて餓死する者も多いので、折角募つた金やお米を施
與して了つた。二度目にもやはり大饑饉に遭つて窮民に施し、三度目に漸く出版
の業に取りかゝつた。其の卷數五千四十八卷、幾多の苦心と困難に打勝つて、寛
永八年から延寶六年迄四十八年間を費して赤手獨力これを完成し得たのである。

日 三 月 九

智を廣むるは讀書にあり

○大正十年……皇太子殿下(今上天皇)歐洲より御歸朝あらせらる

○大正十二年……大震災のため東京神奈川千葉埼玉に戒嚴令を布く

寧靜は是れ心を養ふの第一法なり。

謹謙は是れ身を保つるの第一法なり。

讀書は是れ智を廣むるの第一法なり。

含蓄は是れ人を待つるの第一法なり。

慎交は是れ害を遠ざくるの第一法なり。

安祥は是れ事に應ずるの第一法なり。

知足は是れ樂を受くるの第一法なり。

存厚は是れ福を招くの第一法なり。

寡慾は是れ壽を延すの第一法なり。

—(白河樂翁座右銘)—

日 四 月 九

和協心を一にせよ

○明治二年……大村益次郎刺さる

○昭和十二年……臨時議會の開院式に異例の勅語を賜ふ

昭和十二年九月四日、日支事變中の第七十二臨時議會開院式に當り、天皇陛下には、時局の重大を御軫念遊ばされ、特に時局に對する明鑑を垂

れさせ給うた。その聖勅には、

帝國ト中華民國トノ提携協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ擧クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百難ヲ排シテ其ノ忠勇ヲ致シツツアリ是レニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄以テ所期ノ目的ヲ達セムコトヲ望ム

と仰せられ、國民は上下、聖勅を奉戴し、和協以て叡慮を安じ奉らねばならぬ。

日五月九

目的貫徹のために邁進せよ

○天保六年……天保通寶及銅錢を鑄る

○明治三十八年……日露講和條約ポーツスに調印す

第七十二議會の開院式に優渥なる勅語を賜はるや、時の首相近衛文麿公爵は、聖旨を奉戴し、更に内閣告諭を發した。その後節に於て左の如く論してゐる。

凡そ難局を打開し國運の隆昌を圖るの道は、我が尊嚴なる國體に基き、盡忠報國の精神を振ひ起して、之を國民日常の業務生活の間に實踐するに在り、國民精神總動員の眼目も亦此に存す。古來我が國民は艱難に遭遇するや、必ず之を克服し、以て國家興隆の成果を收めざるなし、時局に際し國民深く如上の趣旨を體し、忠誠公に奉じ、和共心を一にし、日本精神を昂揚して舉國一致の實を擧ぐると共に、之を實踐に現して愈々國力の伸張を圖り、以て皇運を扶翼し奉る所あるは本大臣の深く全國民に期待する所なり。

日六月九

各々その職を務めて糧あり

○慶應三年……伊太利と通商條約を締結す

○明治三十八年……日露休戦令大本營より下る

當世の人を見るに、南北に奔走し東西に往來して富家の門を數ふ、偏に飯錢を求むるがためなり、三五の家人を養うて我等興に扶けられ、渠を使ふと思へり、渠を使ふに似たりと雖も、唯渠につかはるゝなり。五人の家人を養ふ者五人の苦を受け、十人を養ふものは十人の苦を受く、五人を養ふ時は十人の糧を得ざれば養はれず、これを求めんが爲に南北に奔走する、渠に使はるゝに似たり。幻櫻梨傍にありて云く、師の言然り、されどもその家をはなし、其名空しからんは口惜と思ふ故に、家名に使はると思へり。農は耕を勤む、勤むるときは則ち糧あり、工商各々その職にその祿あり、各々が家に各々糧あれども、その職を勤めずしてその糧をくらはす、人の能く勤めて富める家を勤へて詔ひ、他人の糧を受けて食ふ。これを家名につかはるゝと云はんや。

—(東海夜話)—

日七月九

人を咎めず己を省みよ

○安政五年……梅田雲濱幕吏に捕へらる
○明治五年……東京京都間電信開通す

人に交るには自反をむねとすべし。自反とは自らに反るなり。人を咎めずして、我身に立ちかへりて善を己に求むるを云ふ。人我にしたがはずに背かば、我が過を責めて、人を咎むべからず。人に求めずして、我が身に求むべし。我が身をかへりみて、過なくとも、わが行のいまだ至らざる故と思ひ人を責むべからず。怒りそしるべからず。是れ自反なり。自反は、身ををさめ、人に交り、世に居る要道なり。人我をそしらば、誹るものを咎むべからず。我が身にかへりみて求むべし。我が身に一分の過あり、人我をそしること十分なりとも、我が過よりおこりし事なれば、恨むべからず。わが過をせむべし。是れそしりを止むる道なり。左もなく、たゞ人をとがめ、人をうらみて、我に求めざれば、人のそしりは止むべからず。

—(貝原益軒「大和俗訓」より)—

日八月九

百年の計は徳を種うるにあり

○明治元年……明治と改元、一世一元の制を定めらる
○明治三年……明治天皇と越中島に薩長土肥四藩の練兵を覽給ふ

古語に曰く「一年の計は禾を種うるに在り、十年の計は樹を種うるに在り、百年の計は徳を種うるに在り」と。禾を種うるよりは樹を種うるがよく、樹を種うるよりは徳を種うるに如くはない。されど徳を種うることに、微にして累ならず、徳を種うることに愈々高まるに随つて、衆目之を仰ぎ見るに難い。勢ひ空漠として捕捉し難き感なきを得ないのである。一畝の田を開いたとか、一軒の家を建てたとか、幾株の木を栽えたとか、或は幾町の道路を改修したとかいへば、何人も直ちに之を見、これを知ることが出来るけれども、徳は視る能はず測るべからず、事甚だ容易ではないのである。都下數千、全國幾萬の學校があり、智を研き能を啓くに備はるところ多しと雖も、果して徳を種うるに適切なるものがあるであらうか。人格の陶冶の未だ學校丈けでは不可なる所以である。

書を讀んで邪智なれば國を亂す

○明治四年……正午午砲の制を設く

○明治十六年……大日本教育會(後の帝國教育會)創立す

言葉花咲くものは心必ず實なし

口に密を造るものは心必ず針あり

妄りに譽るものは妄りにそしる

妄りに悦ぶものは妄りに哀しむ

利慾に耽るものは人倫の道を失ふ

色慾に迷ふものは時に親戚にそむく

文盲の邪智は人の害を爲すこと多し

書を読みて邪智は國の大義を害す

氣に感じて始むるは暫にして消え散る

心に感じて爲すまことは未を遂げて成る

—(新井白蛾)—

信仰も無限の放縱を許さず

○永祿四年……謙信、信玄川中島に決戦す

○明治四十年……樺太に於ける日露境界劃定書を公布す

國民教養の本源は實に教育と宗教とにある。而して我が國教育の大本は教育勅語に於て闡明されてある。父母の孝、兄弟の友、夫婦の和、朋友

の信、衆庶の博愛、智能の啓發、徳器の成就、即ちそれは宗教以上に超絶した絶

對の權威を有せる祖神以來の遺訓遺徳と、臣民の祖先が君國に奉じ來れる一心報

效の本分とを昭示し給ひ、萬世に一貫せる不磨の教典たらしめ給うた。この大範

によつて、これを實踐躬行し、茲に始めて我等は完全なる臣民たるの職分を果す

ことが出来る。これと共に宗教信奉の自由は、憲法に於て定められる所であ

るが、然しながら國民信仰の範圍は無限の放縱を許すものではない。國體及び國

法に準據し、法治と宗教とを調和し、宗教と教育とを歸一せしめなければならぬ。

國體國法に背反する宗教や信仰は嚴に禁止せられること又當然の理である。

日一十月九

權利あるところ必ず義務あり

○文化三年……露艦唐太を侵す

○天保十四年……平田篤胤歿す、年六十八

日本臣民は法律の範圍に於て自由を有し、又其保護を受ける。即ち日本臣民はその生命財産名譽等を保護せられ、文官、武官及び其他の公職に就くを得、又法律の範圍内に於て居住、移轉、言論、著作、集會、結社、信教等の自由が許される。然しながらこれらの權利と自由の一面には日本國民としての義務が課せられる。曰く兵役の義務、曰く納税の義務即ちこれである。凡そ權利あるところ必ず義務これに伴ふ。苟も立憲治下の國民は、自己の權利に眠ることなく、自らこれを尊重すると共に、他の權利に對しても、十分これを尊重しなければならぬ。それと同時に、決して國民たるの義務を果すことを怠てはならぬ。國民が國民としての義務を果すことを強制せらるるが如きは、正に道義の衰頹を示すものであつて、忠良なる臣民の天地に恥すべき所と心得なければならぬ。

日二十月九

納税は名譽ある負擔である

○明治五年……新橋横濱間鐵道開通に明治天皇臨御あらせらる

○大正十二年……帝都復興に關する詔書下る

國家の生存を持續しその發達を隆盛ならしめんがためには國費を要すること、個人の生存に經費の缺くべからざると同様である。國民は國費の負擔に任じ、納税の義務を果さなければならぬ。租税に國税と地方税とがあつて地租、所得税、營業收益税は國税中の最も重要なものである。その徵税に輕重があり時に應じて變更があるのは、國用の多寡によることであるが、何れもその使途に至つては、國家を維持經營し、公共の要務を處辨するに在るのであるから、國民が其の賦課に應じ、各自の義務を果すことは即ち名譽ある負擔といふべきである。若し徒らに納期を謬り、或は財産を隠匿して脱税を圖るが如き徒あらば、これ國民として又公民として最も恥すべきのみならず、國家の存在を妨害する非國民である。國家がこれに嚴重なる制裁を加ふるは又當然である。

日三十月九

死しては神と仰がるゝ人

○明治二十七年……明治天皇東京御發轂大本營を廣島に移さる
○大正元年……明治天皇御大葬、此日乃木大將夫妻殉死す

陸軍大將乃木希典は誠忠無比の人で、夙に少年時代、謹嚴剛直の父、乃木十郎希次に教育せられ、更に玉木文之進の下に薰陶された。長じて軍人となるに及び、明治十年、西南の役を初陣として、日清、日露の兩戰役に武勳を建て、明治天皇の御親任殊の外厚く、晩年には學習院長として華族の子弟を教育し、身を以て勤儉實踐を奨励された。常に楠氏の誠忠を慕ひ、「根も幹も枝も残らずくち果てて楠のかほりのたかくもあるかな」と詠じた。大正元年九月十三日午後八時、明治天皇の靈輜、宮城を出でます號砲と時を同じうして、赤坂新坂町の自邸に從容として殉死した。

うつし世を神去りましゝ大君のみあとしたひて我はゆくなり
辭世の一句である。靜子夫人も亦これに殉じた。

日四十月九

太陽は一なれども萬物を照らす

○元弘元年……楠木正成河内に兵を擧ぐ
○明治五年……琉球王を藩主に封ず

土は尊い 粃一粒が

秋はこがねの 穂と垂れる

空を仰げば お日さま一つ

一つなれども 世をてらす

てらす光に 草木も榮え

人もさかえる 國も富む

人は働く 野山に海に

村に都に 正しく生きる

明日を樂しみ 靜かに眠りや

空にうつくし お星さま

— (白鳥省吾) —

日五十月九

月は無心にして人萬感

○明治三十八年……奥羽鐵道線全通す

○昭和七年……滿洲國を承認し、日滿議定書に調印す

月ごとに月見ぬ月はなけれども月見る月はこの月の月——といふ歌の心は、月は毎月三ヶ月から十五夜過ぎまで空に照るのであるが、月見と仰ぐは中秋の明月に限るとされてゐるといふのである。その明月を見て「月見れば千々に心はくだくなり我身一つの秋にはあらねど」と詠んだ人もあるが、月は無心である。見る人の心によつて楽しくも見え、悲しくも見える。「人々の心々にまかせおきて高峰に澄める秋の夜の月」月に對して心を亂すはその人の心の未だ到らぬ證據である。心明朗にして、潔白、内に省みて疚しからざれば、月を見ても心の惱みが照り出される筈はない、源頼光さへ「思ふことなく見るべ宿もがな憂世にすめる秋の夜の月」と歌つた。しかしながら「月や我れ我れや月かとかぬまで心も空に澄める夜の月」願くばこの心境に於て常に明月に對したい。

日六十月九

土の恵みに感謝せねばならぬ

○明治十九年……英佛蘭船開港談判のため兵庫に来る

○明治二十七年……日清戦争に平城を占領入城す

私の先祖は四百年間も地面を見詰めて、

畦に蒔いた色々の種に愛の呼吸を吹きかけて來ました。

私は正直な生活を鋤と鎌との間に見出して來た先祖に感謝いたします。

彼等が地面に注いだ四百年間の愛はあだやおろそかで御座いませんが、

今日私が自然の愛をこれ程までに受けることが出来るのも、

私の先祖が與へた愛が始めて私に報ひられたのでありませう。

どうか私の手を御覽下さい、

長い間沈黙の祈禱を地面に捧げて來た先祖の子孫である證據を……。

今私は私に返つて來た彼等の祈禱に向つて感謝せねばなりません。

（野口米次郎「祖先崇拜」より）

日七十月九

人の行くべき道は一筋

○嘉永七年……露艦大阪灣に來航す

○明治二十七年……日清戰役に黃海の海戰あり

蟻の渡る道も道なら、鼠の通ふ道も道である。行誠上人の歌にも「はりを行く鼠の道も道なれど誠の道ぞ人のゆく道」と詠まれてある。梁をゆく鼠の道は、あれは梁上の君子の道だ。梁上の君子といへば偉らさうだが實は泥坊のことである。人間の踏むべき道はそんな道ではない。道路にも車道、人道の別がある。道ならぬ道を通れば命があぶない。「道は近きにあり却て之を遠きに求む」と古人は教へた。人間の踏むべき道に四つある。その一は自己に對する道、その二は家族に對する道、その三は社會に對する道、その四は國家に對する道。けれどもこの道は四つの併行線ではなく、只一筋の道である。この道はいつか來た道、見覚えのある道だ。よしその道が復々線であつても、決して相交叉してはゐない。「わけのぼる麓の路は異れど同じ高ねの月を見るかな」である。

日八十月九

昭和 日本は東亞の盟主

○明治三十八年……日露海軍休戰協定成る

○昭和 六年……奉天柳條溝に滿洲事變勃發す

好むにせよ好まざるにせよ、日本國民は大なる運動を打開した。それは昭和六年九月十八日、奉天柳條溝に於ける滿洲事件の開始だ。世界に向つて日本の立場を、青天白日、正々堂々表白したものだ。即ち日本は何時迄も、歐米の据膳を喰ふものではない。日本には日本の獨自一己あり、其の獨自一己は敢て亞細亞諸民族の魁を作して、東亞恢復の責に膺る事を世界に通告したるものだ。而して其の必然の結果が則ち昭和八年三月二十七日に於ける國際聯盟退だ。國際聯盟は、飽迄現狀固執だ。日本は飽迄現狀打破だ。固執は現在の不平等の爲めに、打破は將來の平等の爲めに。……日本は決して日本一己の爲めに、此の大問題を提起し、此の大運動を開始したのではない。日本は之を以て東亞の同胞に對する天職と心得て、敢て自から其の重責に任じたものだ。

(國民小訓)

人の爲には暖かく

○明治三年……平民一般に姓を稱するを許す
○明治三十五年……正岡子規歿す、年三十六

陸羯南は明治時代の政論家として日本新聞の社長兼主筆として、第一流の人であつた。正岡子規は實に羯南によつてその天才を見出されたのだ。下谷根岸に隣合せに住んで、子規の長い病中にも、常に親切によく面倒を見てゐた。それは單にパトロンといふよりも、もつと暖い情の籠つた保護者であつた。或時、羯南の家の玄關先に御免といふ弱々しいおとづれをする人があつた。それはやつとの思ひで、子規が病床から歩いて來たものであつた。玄關まで來ると、よろ／＼と倒れさうになつてゐた。羯南と夫人とは、彼を出迎へて驚いた。夫妻は大急ぎで座布團を玄關先から廻り廊下まで敷きならべ、其上を抱へんばかりにしていたはりながら座敷へ伴つた。さうして又澤山の布團を積み重ねてその上に子規を倚りかゝらせた。さうして子規の手に當座の小遣を渡してやつた。

物には各々使途がある

○寛永十五年……耶穌教を嚴禁す

○明治元年……明治天皇帝御發遣東京に向はせ給ふ

家康は駿府に退隱した後も、尙自から表向の指圖を怠らず、何かと心を配つてゐた。或る日、側醫の板坂卜齋に向つて、人蔘を與へたことがある。今日でもさうだが、當時にあつては高貴な藥として人蔘は中々貴重なものであつた。卜齋は家康が手振にして渡される人蔘を、掌の上で頂戴するわけに行かぬ。恐縮しながら、ふと傍の違棚を見ると、幸ひ一枚の奉書があつたので、それを取つてその上に人蔘を頂かうとした。すると家康は忽ち手を引込めてしまつた。「さてさて、其の奉書は、予が諸侯へ書状を出す時に使用するものだ。人蔘を包むためのものではないぞ。如何に貴い人蔘だからとて、奉書に受けるには及ばぬ、奉書は一度包み紙にすれば皺になつて再び書状の役には立たぬ。無駄な事だ。」と誠めて、益々恐縮する卜齋の羽織を脱がせ、それに澤山の人蔘を包ませた。

大敵は心の怠慢

○明治三十八年……六博士媾和條約批准拒絶の上奏文を上る
○昭和六年……我軍吉林を占據す

加藤清正が朝鮮の役で、石田三成の讒訴により、秀吉の勘氣を蒙つて内地に引上げることになつた時、何を思つたか其道中、戰場に赴くと同様な物々しい身ごしらへをして、足輕五百人を先に立て、警戒嚴重に後退した。途中で出迎へた戸田氏繁がこの様子を見て、いぶかしげに、後方には一人の敵も居ますまいに、餘り仰々しい御いでたちではありませぬかといふと、「いやさうでない。たとへ道中、敵對する者はなくとも、總じて物の大事は油斷から起る。迂濶に歩いて行けば、何時不慮の異變に出會はないとも限らぬ。其時になつてあはてるやうなことがあつては、多年の武功も一朝にして水泡に歸して了ふ。將たるものが心に怠慢があれば、これに仕ふる下々は、怠慢更に甚しきものがある。されば其心を以て斯くの如く、用意を致してゐるのである」と告げた。

機智は人を制す

○明治元年……會津落城東北平定す
○明治二十八年……東京に救世軍を創設す

西郷隆盛は中々機智に富んだ人であつた。或る時京都祇園の茶屋で遊んだ時、一人の藝妓が、自慢の唄を唄つたので、そのあざやかな喉に感心して、西郷が、褒美をやらうと云つた。何を下さることかと、彼の前に來て坐ると、いたづら者の西郷は、ソレと、火鉢の中の火を挟んで出した。すると藝妓は少しも騒がず、美しい晴衣の袖の上に受取つて、ソッと又火鉢の中に戻した。勿論袖は美事に焼け焦げてしまつた。今度は西郷が詩吟をやつた。前の藝妓が、やんやと褒めて、褒美をあげませうと、前のやうに自分も火鉢の火を挟んでさし出した。先刻の仇討をするつもりである。手の平で受取ればよし、卑怯な眞似をして逃げを張るなら、其時こそ満座の中で彼を嘲つてやらうと思つてゐた。すると西郷は、いやそれは有難うといひながら、煙管に煙草をつめて吸ひつけた。

浮世の夢は曉の空

○明治十七年……茨城縣に加波山事件起る

○明治二十三年……日本大學の前身日本法律學校開校す

「鳴かずんば殺してしまへほととぎす」と織田信長が云つたのに對して豊臣秀吉は「鳴かせて見せうほととぎす」といひ、徳川家康は「鳴くまで待たうほととぎす」といつたといふのは後世の作り話であるが、兎に角家康は穩健着實を旨として世に處した。極めて忍耐強く、又自己を抑制する力がすぐれてゐた。従つて何事にも慎重であり、一步一步堅實な地歩を踏みしめて行くこと云ふ性格であつた。關ヶ原合戦の後、江戸幕府を開き、同十二年駿府に退隱して大御所と呼ばれた。さうして三百年の歴史を誇る徳川幕府の基礎を築き上げたのである。「人の一生は重荷を負うて坂を登るが如し」といつた遺訓は、その七十五歳の生涯を通じた體驗から出てゐる言葉丈けに如何にもどつしりしてゐる。「嬉しやと二度さめて一眠り浮世の夢は曉の空」これが彼の辭世である。

功を同じくしては之を人に賣る

○延享元年……石田梅巖歿す、年六十

○明治十年……西郷隆盛以下城山に自刃し西南の役平ぐ

西郷隆盛は南朝の忠臣菊池武光の後裔で、家は代々島津家に仕へ、隆盛がその十代目であつた。西南の役に、一旦賊名を負うて故郷城山に割腹したのであるが、明治二十二年、憲法發布に際し、聖恩枯骨に及び、賊名を除いて位を復し、正三位を贈られた。隆盛の一生は實に波瀾萬疊であつた。資性高邁にして氣宇宏大、最も實踐躬行を重んじ、一諾は千鈞よりも重く、大節に當つては、天地の大道を進んで自己の安危を顧みなかつた。彼が「天を相手にせよ、人を相手にするな」と言つたのは、この所信を表はしたものである。常に天を敬ひ人を愛し、謹嚴己を持し、一見茫漠たる風采の中に、百事能く通曉し、時に輕妙な諧謔を飛ばしてゐた。彼が處世の信念は「難を避けず、利に迷はず、過を共にしては之を己に活ひ、功を同じくしては之を人に賣る」といふにあつた。

悉く書を信ずれば書なきに如す

○昭和十一年……帝國在郷軍人會令公布さる
○大正四年……聯合軍初て毒瓦斯を使用す(一九一五年)

石田梅巖は丹波の人で我が國心學の祖と稱せられる。初め京都に上つて或る商家に奉公したが、朝は人よりも早く起き、夜は人よりも遅く寝て讀書をつゞけてゐた。肝輩の中にも讀書好きがあつて、梅巖に、君は何の目的を以て書を讀むのかと尋ねた。梅巖はそれに答へる前、君はどういふ目的で讀書をするのかと問返した。すると其人は「私は學者となり度いたためだ」と答へた。ところが梅巖はさうではなかつた。「自分の目的は、聖賢の學を學び、世人の模範となつてこれを教導するにあると云つた。三十五歳の時、了雲法師に禪を學び、後享保十四年、四十五歳の時、心學の講座を開いた。其の教訓の主眼とするところは、敬神、敬主、忠孝、慈悲、憐憫を以てした。門の柱には「席錢入不レ申候無縁にても御望みの方は御遠慮なく御聞き成さるべく候」と彫出されてあつた。

貪る勿れ奢る勿れ

○貞享二年……山鹿素行歿す、年六十四
○昭和六年……日本とフィリッピン間無電開通す

石田梅巖は了雲に入門した當時、會々老母危篤の報に接したので、故郷に歸り、日夜看病に力を盡した。或る時、少しの暇があつて、戸外を歩いてゐる時、忽ち豁然として悟るところがあつた。「鳥の天に翔り、魚の水に泳ぐは其の性である。人の親を思ひ、長を敬ふもまた實に其性である。人の人たる道一に此處に在り」と確信するを得たのである。それで子弟を教へるにも其根本とするところは「我國は神國なれば、神を敬ひまた祖先傳來の宗旨を守り、父母に孝に、兄弟を愛し、主人を敬ひ、奴僕を憐み、殺生を止めて慈悲を専らとし、我を抑へて人を恵むべし、貪る勿れ、奢る勿れ、農となりては農事を務め、商となりては其業を勵み、能く能く國の法度を守るべし」といふにあつた。これを童幼にも婦女子にも呑み込めるやうに、平易に親切に講議するのであつた。

浪費と無駄を省け

○明治元年……明治天皇熱田に於て農民收穫の状を覽給ふ
○昭和七年……滿洲事件勃發す

日本は仁義の國である。禮儀正しい國である。しかし國民として心がけなければならぬことは、家庭生活に於ても、社會生活に於ても浪費と無駄を省くことである。一口に廢物利用といふけれども、廢物を出す前に、もつと物の利用價値を尊重して、浪費と無駄を省くことが肝心である。物品や金銭の浪費ばかりでなく、時間の浪費、虚禮の無駄、手続きの無駄、さういふ點においても尙十分反省の餘地がある。或る會合で、一人三十分の遅參の爲めに百人の人がこれ待つたとすれば三十分の百倍即ち三千分、五十時間の浪費である。食物にしても、膳の上のもの全部に箸を付けずに残すことが禮儀とされるなどは虚禮も甚しい。湯水などの使用の荒いことも、思へば勿體ないことである。吾々は日常の總てに於てもつと節約して總ての物を有効に使はねばならぬ。

人は社交の動物である

○明治三十九年……第一回エスペラント大會を東京に開く
○昭和十一年……ひとのみち教團檢舉さる

人は家族の一人であると同時に社會の一員である。社會に接し、社會に交ることなしには、人は生きては行けない。家の中に引籠つてばかりゐても、毎日食べるお米は農夫の手によつて作られ、魚は漁夫によつて漁られたものである。お膳は樵夫によつて伐り出された木、さうしてその着てゐる着物は紡織工場の女工たちによつて績がれた木綿。綿は、糸は針は、何一つその材料を自分自身で作つたものはない。たとへ直接の交際はなくとも、人間は常に多くの人々の生活のつながりの一端につながつてゐる。「人は社交の動物なり」といふ西洋の諺は狭い意味にも、又かういふ廣い意味にも解釋される。人が社會の一員として生きて行くには守らなければならぬ三つの徳がある。一は禮讓、二は博愛、三は公益。外にもいろ／＼の徳があるがわけて此の三徳が必要である。

三寸の舌身を破り人を害ふ

○享和元年……本居宣長歿す、年七十二

○明治十八年……日本郵船會社創立さる

日本臣民は憲法によつて言論の自由が保證されてゐる。單に辯論のみならず、著作、印行、集會、結社の自由、皆この中に包含されてゐるのである。然しながら著作、印行に就ては著作権法、出版法、新聞紙法があつて其保護と監督とが行はれ、集會、結社に就ては治安維持法があつて取締が勵行される。ただ言論に就ては、小は井戸傍會議より大は帝國議會に迄及ぶ。議會に於ける言論と雖も常に自己の責任を重んじ國家社會の利害禍福に鑑みて決して輕率なる放論暴言を敢てすべからざるは云ふ迄もない。事外交に關する論議の如きは、一句の失言以て國家の威信を輕重することなきにしもあらずである。個人又は社會生活に於ても又然り、流言飛語の慎むべきことは勿論のこと、「口は神の門」といふ人を傷け身を破るの本、三寸の舌より生ずることがないでもない。

創業は大膽に守成は小心なれ

○大正十五年……東京札幌間直通電話開通す

○昭和七年……リットン報告書を外務省に交附す

一、小事に離齷する者は大事成らず、宜しく大事を經營するの方針を執るべし。

- 二、一度着手せし事業は必ず成功を期せよ。
- 三、決して投機的の事業を企つる勿れ。
- 四、國家的觀念を以て總ての事業に當れ。
- 五、奉國至誠の赤心は寸時も忘るべからず。
- 六、勤儉身を持し慈惠人を待つべし。
- 七、能く人格技能を鑑別し適材を適所に用ひよ。
- 八、部下を優遇し事業上の利益は成るべく多く彼等に分與すべし。
- 九、創業は大膽に守成は小心なれ。

—(岩崎家家憲)—

若き生命に永しへの祝福あれ

○明治三十三年……私製葉書の使用を許可す

○大正九年……第一回國勢調査を行ふ

永への青年よ。

双胸しかと大盤石を踏まへ、双手を高く天半にかかげて、

心ゆくばかり、大宇宙の靈氣を呼吸する爽かさ。

胸は膨らみ、筋肉は隆々として勇氣に満つ。見よ、現實は脚下に在り。

寄せては碎くる磯浪の、不斷の争鬪を微笑に迎へて、

眼は遠し、無限のあなた、

久遠の生命の流れ流るるところ、

希望の國土！理想への憧憬！

あゝ、若き生命に永しへの祝福あれ。

—(中村孝也「希望」より)—

偉人の覺悟を以て覺悟とせよ

○安政二年……藤田東湖震死す、年五十

○安政三年……江戸に大地震あり死者二十五萬人

藤田東湖 述懐

三たび死を決して死せず、二十五回刀水を渡る

五たび閑地を乞うて閑を得ず、三十九年七處に徙る

邦家の隆替偶然に非ず、人生の得失徒爾ならんや

自ら驚く塵垢の皮膚に盈つるを、猶ほ忠義を餘して骨髓に填む

瓢姚定遠期す可からず、丘明馬遷空しく自ら企つ

苟も大義を明にして人心を正さば

皇道爰ぞ興起せざるを患へん

斯の心奮發して神明に誓ふ

古人云ふあり斃れて已と

悉く車を數ふれば車なし

○明治二十七年……金鷄勳章令公布さる
○昭和十一年……伊太利エチオピアと開戦す(一九三六年)

横井也有といふ昔の俳人は「これは蓑これは笠とて取り去らばあとには何かかかしなるらん」と詠じた。山田の中の本足の案山子、成程あゝして立つては居るが、これは蓑、これは笠と一々選りわけて見れば、何處に實體があるであらうか。古い支那の諺にも、悉く歳を算へて歳なく、悉く車を算うれば車なしといつてある。一年三百六十五日、積れば即ち一歳であるが、一日は一日、一ヶ月は一ヶ月、一つ一つを切り放せば一年の月日がどこにあるかわからぬ。丁度車の形に於ても、これは車輪、これは心棒、これは車體、これは柄と個の部分を取はづせば車の實は見失はれて了ふ。人もまた斯くの如く、肉體に於ても精神に於ても、所謂内外五藏三十六物の積集であつて、これを解剖してしまへば人といふものの實體は無くなる。人の人たる本體は何處にあるのであらうか。

學問を目からのみ入れてはならぬ

○明治三十五年……露國滿洲より第一次徵兵を實行す
○大正七年……平野丸ドイツ潜水艦に撃沈さる

自覺といふものは内側と外側とからくる。外側は、手、耳、目、鼻、口等から入る。内側は注意力、記憶力、學習力、判斷力、推理力等からくる。學問を目からのみ入れてはならない。百聞一見に如かずといふ。書物で讀んだことを行つて見るとよく解る。然し行つても注意力のない人は駄目だ。それなら出て歩くより坐つて讀んでゐる方がまだましである。西洋へ行つてもぼんやりしてゐる人は何も學んで來ない。人に教へようとするやと勉強するものである。社會のためにならうと思ふと物知りになる。自分のためだと思ふと駄目になる。これは吸取紙と同様で、自分が吸はうと思はないが、人が吸はせるから吸取るのである。人のためにしようと思ふと自分のものになる。人のためになるものから手をつければ、學問は早く出來るものである。 (賀川豊彦「處世讀本」より)

言を飾るは虚偽あるが故なり

○明治三十八年……陸軍六週間現役兵條例を公布す
○大正三年……馬券の發賣を禁止す

己が分に守んぜざるは心に誠なきが故である。
己が身を惜むは心に義氣なきが故である。

己が言を飾るは心に虚偽あるが故である。

己が長を顯はすは心に缺點あるが故である。

他の人を咎たきは心に岐路あるが故である。

他の善を知らざるは心に貪婪あるが故である。

他の事を害ふは心に堪忍なきが故である。

他の短を擧ぐるは心に嫉妬あるが故である。

他にへつらふは心やましきが故である。

他の言を容れざるは心たかぶるが故である。

人には誠實國には正義

○天保十三年……二宮尊徳幕府に召され復興の事に當る
○大正二年……袁世凱支那最初の大統領となる

昭和十二年十月六日、イタリー首相ムソリーニは、日支事變に對して、日本聲援の論説を發表した。曰く、我々は日本の對支進出が國家的生命

保持のためやむにやまれぬ必要に出でたものであることを十分に認識する。その

進出はかゝる見地から全面的に正當視すべきものと思惟する。老婆のくり言や僧

正のお祈りなど我々に取つては正に噴飯ものであり、顰蹙に堪へぬものだ。英國

と雖も英帝國の安全保持のため必要となれば、敵を爆撃するに一刻の猶豫もしな

いであらう。この事實は、英國が過去において爲したところによつて明かである。

この事實は數學的に明瞭で、何等否定の餘地を與へない。ファシズムの性格を保

持し、この政策並に國民の性情が、反ボルシェヴィズム的態度傾向を示してゐる

事情に鑑み、イタリー政府は日本に對して絶對の共感を表示する一と。

共に勵み共に學べ

○明治二十二年……軍艦旗新たに制定さる

○大正三年……第一艦隊ヤツブ島を占領す

人生五十年の中、半分眠つたとして二十五年。その中十年間は勉強しなければならぬ。残るのは十五年。さう考へると詰らないものを讀んでほられぬ。日本アルプスへ登ると登つた氣がするけれども、その邊の丘のやうな山へ登つても山登りとは思はれない。エマーソンといふ人がいつてゐる。一年位経つてもまだ名聲のあるものなら讀んでもいゝと。聖書や佛書や佛典は何千年経つても廢れない。さういふものを讀んでゐると自分も成長する氣になる。私は一生に名著は七百五十冊位讀めばいゝと思つてゐるが、それがなかく讀めない。良い書物は人に分けて讀んで貰つて聞けば自分が讀んだのと變りがない。フランクリンが偉くなつたのは友人と讀書會を開いたからである。人は共に勵んで共に勉強する氣持がつけば偉く成らずにはゐない。(賀川豊彦「處世讀本」より)

境遇に支配されるな

○明治四年……岩倉具視等歐米に派遣さる

○明治十三年……小笠原島を東京府に屬せしむ

人々各々其の境遇を異にするが、決して境遇に支配されず、貧乏な家庭に生れたものは決して貧乏を悲觀するやうな心を起さず、却て之は自身自身を大成せしむるために與へられた試練であり機會であると思つて立身出世の向上の一路を辿り、如何なる苦難にも忍従して之を切りぬける様心がけねばならぬ。富める者は之を以て福をなし、環境に支配されて墮落する様な事なく國家の爲有用の人物たるべきである。人間は兎角環境に支配され易いものであるが大政治家、大實業家、大學者、大教育家などを始めとして、凡て傑出した人物は環境に支配されず、之を突破した人々である。元より貧富によつて差別などあらう筈はない。偏に其の本人の心掛けと努力忍耐如何に據るものであるから、之を心に銘じて其將來を過らぬ様、有用の人物なるたるを期すべきである。

日 九 月 十

小悪たりとも天理を恐るべし

○寛文六年……山鹿素行淺野家預となり赤穂に向ふ
○明治三十七年……沙河會戦始まる

小悪をなしても天理を恐るべし。その一小悪身を亡すことあるまじと思ふは誤なり。勿論その一小悪は即日忽ちに身を亡すことはなけれども、その心萬事に渉る故、小を積んで大となる。時至るときは則ち必ず身を亡す。筑波山の峰の雫落添ひてみな川の名に立ち、吉野の峰の木々の雫落添ひて竹田の川淀には舟とどむる例もあり、峰より落つる瀧波も、岩に傳ひ上りて水上を見れば縋の谷川なり、谷川を上りて又其水上を尋ねれば、爰の岩の根、彼處の苔の露集りて谷川となり、谷川自ら峻崖より落ちて瀧となる。一小悪と云ふとも、恐れずして之を作るときは、則ち積むところ必ず身を亡すこと必然たるべし——これは澤庵禪師語録の一節であるが、下世話にも虚つきは盜棒の始りといへるが如く煙草の火からも大火が起る。小悪を戒めなければ大悪に打克つことは出来ぬ。

日 十 月 十

醫術の目的は病なからしむるにあり

○明治十五年……日本銀行開業す
○明治十九年……陸軍召集條例を定む

醫術進歩の目的は、醫學博士を増し、病院を増築し、醫藥の種類を煩雜高價にせんが爲ではない。極端なる言葉を以て言へば、病院を無くし、醫者を無くするにある。斯く云へば奇警の言のやうなれども、醫術進歩して病人が無くなれば、病院も不用となり、醫者も多くを必要としなくなる。醫術究極の理想は全くこゝになければならぬ。然るに壯丁は年々體格低下し、血核その他の呼吸器疾患、或は花柳病等年と共に多く、醫術の進歩は却て年々病者を増加せしめつゝある。これでは決して自慢にはならぬ。又我が國は警察制度が頗る完備してゐるといふ。警察の理想も即ち全く罪人を無くするにある。罪人が無ければ刑務署も不用になるわけだが、これまた年々満員の盛況と聞く。然らば警察や刑務署の完備充實も餘り一國の自慢にはならぬ。

巧言よりも眞實を語れ

○明治十八年……日本郵船會社開業す
○大正二年……桂太郎歿す、年六十八

説苑に「智あつて私を用ふるは、愚にして公を用ふるに如かず、故に曰く巧偽は拙誠に如かず」とある。嘘は如何に上手に云つたところで矢張り嘘である。嘘から出た誠といふけれども、本は矢張り嘘である。「ウソ俱樂部」で本當の事が云へたためしはない。言葉巧みな嘘よりも、たとへ言葉はまづくとも眞實を語る人の熱誠には叶ふものでない。どれほど巧妙な細工があつても質がメッキならば何時かは剥る時がある。ダイヤモンドも人造では價値なく、眞珠も養殖では有り難くない。説苑に智あつて私を用ふるとは智慧だけで、有りもしない勝手なことをいふことで、愚にして公を用ふるといふのは、假へ愚者でも公明正大を本旨とするの意である。巧偽は即ち拙誠に如かず、ましてや嘘の一つは百の嘘を生む。嘘をつくほどむづかしいことはないのである。

選舉の公正を守れ

○明和六年……青木昆陽歿す、年七十二
○明治十四年……明治二十三年に國會を開設すべき詔下る

明治十四年十月十二日明治天皇は國會開設に關する勅諭を下し給ひ、明治二十三年を期して國會を開會せしめられることを告げ給うた。即ち五箇條の御誓文に於て廣く會議を興し萬機公論に決すべしと宣はせられたことを現實に遊ばされたのである。帝國議會は政府の提出する法律案、豫算其他の協賛、決算の審査、法律案の提出、上奏、建議、請願等の事に當る立法機關であるが、これに選出すべき衆議院議員の選舉は、國法によつて與へられたる國民の權利であり同時に義務でもある。その選舉に當り選舉する者も選舉される者も最も公正適法に之をなさなければならぬのであるにも拘らず、情實、利慾、權威のため制せられ、不當の議員を選出し、國法に違反し、公益を害するが如きは、國民の恥辱である。今にして尙選舉肅正の聲喧しきは立憲政治の汚辱である。

日三十月十

勤儉以て産を治めよ

○弘安五年……日蓮上人歿す、年六十一

○明治四十一年……戊申詔書下る

戊申の詔書は日露戦役後國運發展に關して國民の遵奉すべき道をお示し
になつたもので、國民の永遠に奉體し、至誠を以てこれが實行を怠つて

はならないところのものである。ことに其中には、

宜ク上下心ヲ一ニシ、忠實業ニ服シ、勤儉産ヲ治メ、惟レ信、惟レ義、醇厚俗
ヲ成シ、華ヲ去リ實ニ就キ、荒怠相誠メ、自強息マザルベシ

と仰せられてある。即ち國民は上下心を協せ、各々忠實に其の業務に服し、勤勉
と儉約とを心掛けて資産を増殖し、各人常に信義を重んじて、輕佻浮薄の風にな
ずまず、風俗を厚くし、華美虚飾を去つて質實を旨とし、互に慎み戒め合つて怠
ることなく、自から勉めて居常片時もゆるがせにしないやうにせよ、これ即ち國
運發展を來す國民たるの道であると宣せられてゐる。

日四十月十

華を去り實に就け

○元和二年……幕府人身賣買を嚴禁す

○慶應三年……徳川慶喜大政奉還の表を上る

更に戊申詔書の一節には、

抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト、我カ光輝アル國史ノ成跡トハ、炳トシ
テ日星ノ如シ、寔ニ克ク恪守シ、淬礪ノ誠ヲ輸サハ、國運發展ノ本近ク斯ニ在
リ、朕ハ方今ノ世局ニ處シ、我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷
ヲ恢弘シ、祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ

とも仰せられた。即ち國運發展の道の基く所は皇祖皇宗の御遺訓と、光輝ある三
千年の國史の成跡に徴して明らかである。されば國民は此の御遺訓と、國史の成
跡の示す教訓を守り、奮勵努力せよ。國運の發展は自から期してこゝにある。さ
うして益々明治維新の廣大なる規模を擴張し、以て皇祖皇宗の御威徳を發揚せん
ことを冀ふものであると宣せられた。

日五十月十

一榮一落これ春秋

○明治三十七年……沙河會戦に大勝す
○大正八年……第一回帝展を開く

天神さまと仰ぎ祀られる菅原道真が藤原氏の讒奏によつて太宰府へ流されたのは昌泰四年正月のことであつた。筑紫に下る途中、明石の驛では「驛長驚くなかれ時の變改、一榮一落これ春秋」といふ詩を詠まれた。太宰府に居ること三年、深く謹慎して門を出でず、日々皇恩の厚きを思うて感拜してゐた。九月十日、都にあつて宮中の御宴に侍した時の事を思ひ、追懐の情禁ずること能はず、誠忠の心を詩に賦した。有名な詩である。

去年の今夜清涼に侍し

秋思の詩篇獨り斷腸す

恩賜の御衣今こゝに在り

捧持して毎日餘香を拜す

日六十月十

眞理は一にして二あらず

○明治三十八年……平和克復の詔書下る
○明治四十一年……指紋法實施さる

日本人の本來持つてゐる國民性の神髓は、純潔を重んずるといふ性である。これは非常に尊い性である。益々發達せしめなければならぬ。何故といふに、眞理と云ふものは一にして二あるべからざる最も純一なるものである。人間の履むべき道も亦一にして二あるべからざる最も直なるものである。かゝる單純な、しかしながら重大な事を遂げるには、事物の單純なることを最も深く愛護し、又崇拜し、好尚する所の國民にあらざれば爲し遂げられないからである。今や列國が對峙して千差萬別の好尚や主義や學說が行はれ、色々の宗教が行はれ眞偽混淆して何れが正しい理であるか、何れが眞直な道であるか分らない時に於て、最も正直な、最も高潔な、己れを空しうして道を思ふ國民、本當に情潔を愛する國民の天職に俟つ所極めて多大である。

日七十月十

大御心を安じ奉れ

○嘉永六年……ナポレオン一世セントヘレナに流さる(一八五三年)
○明治元年……始めて朝堂に萬機を親裁し給ふ

昭和十二年十月十七日神嘗祭の當日、天皇陛下には時局の速かなる安定を望ませ給ふ大御心から、全國十一萬の官國幣社以下各神社に於て中祭を執行せしめ給ひ、且つ此の日、天皇陛下には宮中賢所において神嘗祭の御儀を御親祭あらせられ、豊稜の新穀を奉る御告文を奏し給ふに當り、特にその御辭別において日支事變の經過を詳さに御親告遊され、更に時局の速かなる安定と、東亞の平和確立とを御祈念あらせられ、ついで神嘗祭當日としては全く御異例の御儀を皇靈殿、神殿にも執り行はさせられ、祖宗、神祇の大前に同様の御祈念あらせられ、又勅使を差遣遊ばされて、伊勢神宮に參向奉幣せしめられたのである。斯くの如き御祭典、御祈念は宣戰布告による戰役以外、全く御前例なく、如何に重大なる時局に大御心を勞させ給ふか拜察し奉るだに畏き極みである。

日八十月十

服装て人を判ずることを慎め

○明治三年……外國人の東京府下遊覽を許す
○明治二十二年……大隈外相遭難隻脚を失ふ

一休和尚が或る時、京都の町を歩いてゐると、立派な家で盛んな法事をやつてゐた。綺羅を飾つた坊さんたちが多勢招かれて御馳走を食べてゐた。一休和尚が其門前に立つと、彼の垢染みた風態を見て、乞食坊主とも思つたものか、僅かのおひねりだけで追ひ拂はれた。その後暫く絶つて、又其家で法事があるとき聞いた一休和尚は、今度は立派な衣を着けて出かけて行つた。其家の人は、わざ／＼御經を讀みに來てくれた奇特な坊さんだと思つて、上座に請じ、澤山の御馴走まで出してくれた。すると一休和尚はお膳の上には目もくれず、黙つて衣を脱いでそれを膳の上に供へて禮拜した。家の人が怪しんで其のわけを尋ねると、一休和尚先日は見すばらしいなりをして居たので追拂はれたが、今日は此の通りのおもてなし、これ偏に美しい衣のお蔭ですと答へた。

日九十月十

敵をただ討つと思ふな身を守れ

○明治六年……上野浅草等に公園を設く

○明治三十五年……早稻田大學開校式を行ふ

伊藤一刀齋は無想劍の奥儀を極めた達人であつた。千人以上の弟子の中で神子典膳に奥儀を傳授しようとする豫て考へてゐたところ、兄弟子に當る善鬼はどうしても自分に免許皆傳を授けて貰ひ度いと再三懇望した。さうして若しそれが叶はねば、典膳と眞劍勝負をさせて下さいと申込んだ。善鬼は元來下賤の身で、心もすなほでない。一刀齋は困つたものだとは思つたが、遂にその勝負を許した。二人の眞劍勝負は葛飾の小金ヶ原で行はれた。勝負は小半時経つても中々決しない。「敵をただ討つと思ふな身を守れおのづから漏る賤が家の月」と一刀齋に教へられた通り、典膳は相手の呼吸を計つて相手の打込んで来るのをいつ迄も待つてゐた。善鬼は遂に打込んで来た。其瞬間、既に善鬼は一刀の下に仆されてゐた。「美事ぢや、典膳、それが夢想劍の極意だ」と一刀齋は教へた。

日十二月十

邪はよく正に勝たず

○安政三年……二宮尊徳歿す、年七十

○大正三年……カロリン、マリアナ群島を占領す

伊藤仁齋が或る時旅の夜道で、數人の盜賊に取りかこまれた。型の如く着物もぬいで有金残らず置いて行けと、刃物をつきつけて嚇した。仁齋は少しも騒がず、財布を與へ、裸になつて、すたく立ち去らうとした。この悠然たる態度に、今度は盜賊の方があつけにとられ、顔見合せて仁齋を呼びとめた。俺達は何年とこの商賣をしてゐるが、お前さんのやうに落付いた人間に出會つたことはない。一體お前さんは何の商賣をする人だと尋ねた。仁齋はニコリと笑つて「わしは儒者ぢや」と答へた。「儒者ツて何をする商賣だね」と又盜賊が尋ねた。「成る程、あんた方は御存じあるまい、儒者とは人倫五常の道を教へるのが商賣ぢや。親に孝、兄弟に友、總て忠孝禮信の教へをいたすもので、五常の道を知らぬものは鳥獸も同様ぢや」と、懇々説諭を加へ、盜賊共を改心させた。

我が足下に氣をつけよ

○安政四年……米使ハリス將軍に謁して國書を呈す

○文化二年……トラファルガー海戦にネルソン戦死す(一八〇五年)

ある盲人が宿に泊つて朝まだ暗いうちに出立しようとする。そこで宿屋の主人が、提灯を持つておいでなさいと注意した。私は盲だから提灯はいらぬと云ふと、主人は、いやこの暗さでは、向ふから来る人が突當るといふ。成程と思つて、提灯を持つて出かけた。すると五六丁も行つたところで、向ふから來かゝつた人が、ばつたり盲に突當つた。盲は大層腹を立て、「己に突當る奴は盲か」とどなつた。そうどなられると先方の人も癪にさはる。「おれは盲ぢやない、お前さんこそ盲だらう」と云ひ返す。盲の方では益々腹を立て、「これこの提灯が見えぬか。この盲奴」とどなり返したが、さてその肝腎な提灯は、宿屋の門口を出るときに、夙に消えてゐた。「どうぞお互に、火は消えてゐないかと、日々に吟味致したいものでございます」と「鳩翁道話」に書いてある。

本末輕重を考へよ

○明治三十八年……東郷大將凱旋す

○大正八年……東京大阪間に最初の郵便飛行を試む

凡そ物には本末があり、事には順序がある。本末を見、順序を考へて行へば、忙しい間にも出来ない事はない。本末を顛倒し、順序を失するから、仕事が増く忙はしくなる。順に行へば左まででない一日のことも、之を一瞬に考へるから、非常に忙はしく思はれる。義務も亦同じく、總て輕重がある。重いものから軽いものに、順序を追うて行へば、忙しい間にも餘裕が出来る。艱難とか辛苦とかも、一度に一生のことを考へるから大變なことになる。親が歿する、妻子が病氣にかゝる、思うた事が成らぬ、人から反對を受ける。人間が生の際に受ける一切の艱難を一時に考へるから、如何にも堪へられぬ様に思はれる。併しその艱難も、前後を分けて考へれば、割合に樂となり、餘裕も出来る。忙しくて黙思する邊がないといふが、黙思すれば却て餘裕が生ずる。(「修養」)

日三十二月十

夏草や兵どもが夢のあと

○天保十三年……江川太郎左衛門大砲鑄造の許可を受く
○明治三十八年……横濱沖に凱旋大觀兵式行はる

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の址一里こなたにあり。秀衡が跡は
田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館にのぼれば、北上川は南
部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る
泰衡等が舊跡は衣が鬮を隔て、南部口をしさ堅め、夷をふせぐと見えたり。さて
も義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春に
して草青みたりと、笠打敷きて時の移るまで涙を落し侍りぬ。——夏草や兵ど
もが夢のあと——かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂
は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の扉風に破れ、金の柱霜
雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍みて墓を覆ひて風雨
を凌ぎ暫時千歳の記念とはなれり。
——(松尾芭蕉「奥の細道」より)——

日四十二月十

蛙飛び込む水の音

○明治六年……西郷隆盛辭職す
○昭和九年……東京メキシコ間無電開通す

私共日本人が、芭蕉の、「古池や蛙飛び込む水の音」を歎美する理由は
何處にあるであらうか。芭蕉の草庵の秋もさびて、古池へ飛び込む蛙の
音は突然寂莫の天地を破るであらう……。静は動と轉換する。私共が静と云ひ
動と云ひ、或は生と云ひ死と云ふ、これ唯境地の一變化に過ぎないであらう。然
しこの芭蕉の句は、哲理を説くものではない。禪宗の神祕主義を人に強ひるので
も無い。勿論地下の芭蕉を再生せしめなければ、その句の眞意は適確には分らな
いが、然し讀者は讀者で勝手にそれを了解して差支がない。善良な讀者のない所
に善良な詩歌のある筈がない。特にこの十七字といふ小さな詩は、讀者の共力
に待つ所が多い。さうして私は芭蕉の俳道の極意がこの一句にあるとさへ思ふこ
とがある。
——(野口米次郎「俳句の鑑賞」)——

日五十二月十

静中動あり動中静あり

○明治十三年……君ヶ代の樂譜を現在の如く定む
○明治四十年……文部省第一回美術展覽會を開く

外人が私の所へ来て何か日本獨特のものが見たいといふ時、私はいつも茶席へ案内する。そして「こゝは外面的世界を捨て、自己遍照に入る通路だ」と説明する。私は彼に茶席を取巻く小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜を経て灰色になつてゐる老樹を指さしていふであらう。「君はこゝに沈黙の祝福がある事を感じねばならない。私共東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞のなかに發見するのだ。寂寞の幽かな光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿といつても、また唯美の悅樂境といつてもいい。その名前はどうでもいゝ……こゝは孤獨に生きる無遍の住む所だ。眞實の個人主義を發見して、そして宇宙の靈に合する所だ」と。それから私は古びた花崗岩の燈籠が聖人か哲人か詩人でもあるやうに蹲つてゐる姿に注意させるであらう。 — (野口米次郎) —

日六十二月十

人は死して名をとどむ

○明治四十二年……伊藤博文ハルビン驛頭に狙撃さる
○大正十四年……日本青年會館竣工開館す

帝國議事堂前、道路を距てた所に大勳位伊藤博文の銅像が建つてゐる。伊藤公は我が國の憲法制定及び國會開設に就いて勳功が著大であつた。夙に幾多か歐米を巡視して新日本建設のために力を致し、明治十五年には更に勅命を奉じて、歐洲立憲國の憲法制度及びその實際を調査せんがため、西園寺公望伊東已代治等を従へ、在歐一年有半、歸朝後先づ内閣制度と宮内制度の改定に従事し、また井上毅等と憲法起草の事に従つた。明治十八年太政官制度を廢し、新に内閣官制が實施された時、我が國最初の内閣總理大臣に任せられ、宮内大臣を兼ねた。同二十一年四月憲法草案成り、伊藤公は其時樞密院議長として審議を完了した。同四十二年十月滿洲巡遊の途次、ハルビン驛頭に於て兇漢のために狙撃され六十九歳を以て歿した。今、東京市荏原區大井に博文神社が祭られてある。

勢力の濫費を戒めよ

○安政六年……吉田松陰死す

○明治二十一年……皇居を宮城と改稱せらる

吉田松陰は、碁、將棋、酒、煙草など、凡そ娛樂的なもの、一切をしりぞけた。書物は好きでも、書畫骨董の道樂は更になく、たゞひたむきに眞の讀書、心のため、道のための讀書にのみ没頭した。そして死ぬまで獨身で通した。當時彼の議論が、他の誰かれの議論よりも鋭く、また一頭地を抜いて光つてゐたのは、有り餘る勢力を、他の何物にも費さず、たゞその一方に傾注したからである。松陰程の人に於いて尙且つ一事をなす爲には、他を顧みる暇がなかつた。まして凡俗の人が他人に秀でようといふには、どうしても、娛樂、物慾を捨てなければならぬのみならず、自分として成し遂げたいと思ふ仕事の多くを棄てなければならぬと、嘗て井上哲次郎氏が言はれたことがある。誠に至言である。就職難、薄給、失業をかこつ人が、どうして娛樂などに没頭出来るのだらうか。

責任のためには犠牲をも惜むな

○明治九年……前原一誠萩に亂す

○明治二十八年……北白川宮殿下臺灣に薨去あらせらる

澁澤榮一翁曰く「現代人は責任を自ら負はふとはせずして、之から遁れようとしてゐる傾があるが、自己を犠牲にしても責任は果さねばならぬといふ確乎たる覺悟が必要である。人に褒められずとも他に知られずとも、そんなことには頓着なく、只自ら自己の責任を果せばよい。そこに無限の歡喜と崇高の自尊心が起る。隣の人から見られるので、仕方なしに責任を果すのは、自分の責任を果すのではなくて、他人の責任を果すのである。毀譽褒貶を度外視して犠牲的觀念を以て責任を果す。——これが即ち眞の責任を果す所以である」と。明治二十六年十月の末、汽船東海丸が日本海を航行中、風波のために、露船と衝突大破して沈没した。乗客船員約百名の内、その半数は敢へなく溺死した。船長は身を帆柱に縛り付け、高く汽笛を鳴しつゝ船と共に海底に沈んだ。

熱心は希望を生む

○慶應三年……王政復古を先帝の御陵に報告し給ふ
○大正八年……ワシントンに第一回労働會議を開く

安岡玄眞といふ醫者があつた。一冊の書物を書き上げてそれを江戸中の醫者に見せ歩き、やがて宇田川玄隨といふ有名な蘭法醫の所にやつて來た。玄隨は一目見たばかりで押返した。さうして漢法と蘭法との優劣を説明した。玄眞はむつとして立去つたものゝ、成程漢法の心細さがわかつて來る。そこで潔く自分の著述を焼棄して、改めて玄隨の門人にしてもらつた。或る日講義が終ると、重箱入りの強飯を出された。これを受取つた玄眞は、皆に分けないで、どこかへ匿れて終つた。彼は毎晩遅くまで流し按摩に出て糊口を凌ぎつゝ勉強してゐたのだが、この二三日雨つゞきで稼ぎがなく、一食も食べないでゐた。強飯を見ると夢中になつて、一人で平けて了つて、とうとう一間に倒れてゐるのであつたからした熱心さに玄隨は我家へ引取り後養子にした。宇田川玄眞が此人である。

あな尊し大勅詔

○明和六年……賀茂眞淵歿す、年七十三
○明治二十三年……明治天皇教育勅語を下し給ふ

我が國には、建國二千六百年、世々相傳へられた日本精神がある。英明なる明治大帝は皇祖皇宗の御遺訓を、幼き頃より一層我が國民の上下に徹底せしめたいとの大御心より、教育に關する御勅語を下し賜はり、この聖訓こそは、我が皇祖皇宗の萬世に示し繼がれた御遺訓であつて、斯の道は獨り現代の國民のみならず、子孫臣民の俱に守らなければならぬ道であり、いつの世、どの國へ行つても、合はないことはない。さうして、
朕爾臣民ト俱に拳々服膺シテ咸其ノ徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ
と仰せられた。即ち畏くも明治大帝は、吾々臣民と共に、斯の道を深く信じ、堅く守つて、君臣みな悉く同じやうにその徳を行ひ、皇祖皇宗の御遺訓の御趣意に背く者のないやうにしたいと宣はせられたのである。

日一十三月十

道は猶大路のごとし

○明治二十八年……清國より第一回償金五千萬兩を受取る
○大正二年……青島攻圍軍總攻撃を開始す

柴田鳩翁曰く、「義は人の路なり」と孟子は申された。義といふは無理をせぬ事ぢや。無理をせねば人交りは申すに及ばず、萬物と交つてよろしかるがゆゑに古人も「義は宜なり」と仰せられた。家來としては奉公に精を出すのがよろしい。嫁としては舅姑に孝行にし、夫を大切にすることが宜しい。その宜しいのが人の道ぢや。道とは「猶ほ大路のごときなり」と古人も云へる如く、江戸へ行くも、長崎へ行くも、表へ出るも、裏へ出るも、隣へ行くも、雪隠へ入るも、皆それぞれに道がある。もし道を行かぬと屋根越しをしたり、溝へはまつたり、野越し、山越し、とんでもない所へうろたへもする。是と同じ事で、人の上でも宜しくない事をする、親を泣かせたり、夫に腹を立てさせたり、人を怨んだり、怨まれたり、みなこれ宜しくない事ぢや。

日一月一十

奢侈贅澤の風を改めよ

○元龜二年……織田信長皇居の修理を竣成す
○明治十五年……東京銀座に始めて電燈を試む

これから進む青年には第一に身體を鍛練することが大切である。氣力を養成することも必要である。けれども差當つて、質素に甘んじ、困苦缺乏に堪ゆる習慣を養つて、奢侈贅澤の風を押へて仕舞はねばならぬ。然しながら幾ら青年に向つて質素にせよ、奢侈の風をするなどというても、上に立つ者が奢侈贅澤の風を爲て見せては効果は擧がらぬであらう。いくら學校でやかましく言つても、家庭や社會が奢侈墮弱の風で固つてゐては、丁度十日の間骨を折つて暖めても、一日之を冷せば何の効もないやうに、なか／＼學校だけで青年の氣性をしつかりさせて行くことはむづかしい。世の父兄或は先輩が、自分の子弟又は後輩の青年を立派な人物に育てたいと思つたら、先づ自身に奢侈贅澤の風を止めて、質素を守るやうにして貰ひ度い。

—(乃木希典「修養訓」より)—

日二月一十

七生に至つた後に可となす

○大正十五年……軍艦三笠保存記念式を行ふ
○昭和六年……東京科學博物館開館す

余嘗て東遊し、三度湊川を經、楠公の墓を拜し、涕淚禁ぜず、其の碑陰に明の徵士、朱生の文を勒するを觀るに及び、則ち復た涙を下す。噫余楠公に於て骨肉父子の恩あるに非ず。師友交遊の親有るに非ず。乃ち知りぬ、楠公朱生及余の不肖、皆理に資つて以て心を爲せば、則ち氣屬せずと雖も、而も心は則ち通ず。是れ涙の禁ぜざる所以なり。余不肖、聖賢の心を存し、忠孝の志を立て、國威を張り、國賊を滅すを以て、妄りに己れが任と爲す。一跌再跌、不忠不孝の人と爲り、復た面目の世人に見ゆる無し。然れども斯の心、已に楠公諸人と斯の理を同じうす。安んぞ氣體に隨うて腐爛潰敗するを得んや、必ず後人をして、亦余を觀て興起せしめむ。七生に至つて而して後に可と爲すのみ。噫、是れ我に在るなり。

—(吉田松陰「七生説」より)—

日三月一十

心の中の敵をおそれよ

○明治四十三年……帝國在郷軍人會發會式を行ふ
○昭和三年……初めて明治節を行ふ

物質的に見れば我が日本の前途は決して悲觀すべき理由はない。若しその理由ありとせば、その物質的でなく、精神的である。精神的の缺陷である。我等は此の一點に就て我が青年男女各位の注意を喚起したい。それは有爲の青年は、動もすれば翻譯かぶれの邪惡思想に中毒し、無爲の青年は、物慾萬能の遊蕩風潮に陶酔す。是れ實に國家の前途に横はる由々敷大敵にして、即ち其の敵は外にあらずして内にある。此の大敵を制するには、装甲車や飛行機や、毒瓦斯の類では間に合はない。此れは只青年各位の内觀、猛省によつて解決すること出来る。諸君の精神的食糧は、日本の歴史である。取り分け維新の歴史であり、特に取り分け明治天皇の盛徳大業を研究し、之を景仰することである。明治天皇は、恐れながら我が青年男女各位の指導者に在らず。(徳富蘇峰「國民小訓」より)

日四月一十

駐滴石を穿ち焼點物を焼く

○明治四十二年……伊藤博文の國葬を行ふ
○大正十年……原首相東京驛に遭難す

われ／＼共が眞人間にならうと志すに當つて、先づ取り掛はねばならぬのは、薄志氣行といふ惡癖である。いかにしたらば之れを除くことが出来るようか。先づ第一に習得せねばならぬのは根氣である。詳しく云へば「物事にじつと氣をつめる癖」即ち種々の事事に氣を散らさぬやうにして、或一時或一物にじつと精神をそゞぐこと、更に手早く言へば物事に注意をする習慣、これが人間になるための最初の、而も最も大切な資本である。根氣即ち一意専念の心癖は人の人たる所以の根本美德である。これがなければ到底眞人間どころか、並の人間にもなれぬ。根氣さへあれば、如何程に無智でも無才でも棄てたものではない。檐滴石を穿ち、焼點物を焼く。一念凝つては岩をも透すが、萬能は足つても一心が足らねば役には立たぬ。

—(坪内逍遙「通俗倫理談」より)—

日五月一十

人は死して名をとどむ

○延暦十六年……坂上田村麿征夷大將軍に任ぜらる
○明治二年……大村益次郎歿す、年四十六

靖國神社に参拜した人は、その往き戻りに誰しも大村益次郎の銅像を仰ぎ見るであらう。この銅像は明治二十一年に建てられたもので、我國最初の銅像である。大村益次郎は周防の人で、幕末から明治にかけての有數な兵學者であつた。明治二年七月、兵部大輔に任ぜられ、先づ我が國の軍制改革を企て陸軍はフランス式、海軍はイギリス式の制度を採用し、また各藩の藩兵を廢止して、徵兵令による國民皆兵の制を布き、武士の廢刀を斷行し、且つ造兵局、軍事病院、鎮臺、鎮守府を設置すべきことを建白した。然るに同月、兵學校の設立及び兵器製造調査の命を受けて京阪の間に往來してゐるうち、京都の三條木屋町の旅宿で、保守派の長州藩士その他數人の人々に襲撃され、重傷を負ひ、入院加療中、遂に同年十一月五日行年四十五歳で永眠した。

日六月一十

敬愛は萬徳の根元なり

○嘉永六年……曲亭馬琴歿す、年八十二
○昭和十二年……日伊獨防共協定調印さる

頭山滿翁曰く、膽力といつても生れながらにして非凡の膽力を具へて居る偉人もあるが、平生の修養が肝心である。大西郷の如きは、あれで非常な修養をしたのである。不斷の修養を積み、智徳兼備して、そこに一點の私心を交へないと云ふのが眞の人物であり、その一身を終ると雖も教化を萬世に垂る永世不死の人となる。大抵の人間が死んで七十五日経てば忘れられて了ふ。古人にして何時までも後世の人の心に生くる人物には、どこかそれだけの徳があるさういふ古人の言行を味ふことも精神を練る意味にあらう。「本無の處よりすらりと抜けて彌陀の利劍を打ち振るべし、天下の事は自在なり」と文覺上人は申された。本無の處より身を挺して精神を練り、膽力を養成し、萬徳の根元である敬愛を以つて洲斷せず、一日を一生の考へで勵めなければならぬ。

日七月一十

己を空しくして人をいたはる

○天正十八年……朝鮮使節秀吉に謁して國書を呈す
○明治三十四年……李鴻章歿す、七十九

焚く程は風が持て来る落葉かな——良寛和尚は越後國上山の五合庵で悠々自適、自ら足るを知つて、その生活に甘んじてゐた。在るものは鉢鉢一つ、その一つに身を托して味噌もすれば米も研ぐ、顔も洗へば、その水で雑巾がけもする。「飯乞ふとわが来しかども春の野に莖つみつゝ時をへにけり」その良寛和尚の五合庵に泥棒が入つた。泥棒は襦袢一枚で寒々とふるへてゐた。せめてこれなりと持つて行かしゃれといつて、着てゐた袴を脱いで渡した。五合庵の近くに、智海といふ根性のよくない坊主がゐた。何かにつけて良寛を目の仇にしてゐた。ある日の事良寛和尚に喧嘩を吹かけ、擲つて歸つて行つた。其後で大雨が降り出すと、良寛は擲られたことなどケロリと忘れて、智海の雨具を持つてゐないことを氣の毒に思つた。

日八月一十

誠あれば心自ら通ず

○明治二十八年……遼東還附條約に調印す

○大正六年……露國に勞農政府組織さる（一九一七年）

良寛和尚の生家は、出雲崎の名主橋家であつた。其家の後繼になる馬之助は若氣の至りから放蕩に身を持ち崩してゐた。馬之助の母親は和尚に意見をして貰うやうに頼んだ。元來良寛和尚は、人に意見をしたり説法をしたりすることが嫌ひであつた。頼まれたので仕方なく橋家に行つては見たものゝ意見なぞする氣にはなれなかつた。空しく二三日を過して五合庵に立歸る折、和尚は玄關から聲をかけた。「馬之助さん、すまないが、わしの草鞋の紐を結んではくれませぬか。」馬之助は黙つて出て来て和尚の足下にしやがみ、草鞋の紐を結んでやつた。その時、ふと首筋に何やら温いものが落ちた。何かと思つて振り上げば良寛和尚の老眼から涙が落ちてゐた。ハッと思つた馬之助は、爾來ブツツリ心を改め眞人間になつたといふ。

日九月一十

注意一秒怪我一生

○明治五年……曆制を改め太陽曆とす

○明治二十三年……帝國ホテル成る

注意一秒、怪我一生——これは交通上の標語であるが、如何にもよい文句である。交通機關が発達すればする程、交通事故が多くなる。年々どれ程多くの人が汽車、電車、自動車などの交通機關によつて輕傷重傷を負ひ、或は死亡するか知れない。ことに東京や大阪などの大都會になると、毎日頻々として交通事故が起りつゝあるのである。然しその原因の大部分は本人の不注意か幼児の場合にあつては、親兄弟や附添人の不注意に基づく。ほんの「アッ」といふ間、一瞬一秒の不注意によつて、あたら命をおとしたり。一生取り返しのつかぬ不具者になる。まことに恐ろしいことである。此の標語は單に交通上の注意ばかりでなく、人間の生活のあらゆる方面にも適用される。家庭の生活に於ても、學校に於ても、或は人と交はるにも、先づ一秒の注意を怠つてはならぬ。

國力の振興は國民の精神に待つ

○大正十二年……國民精神作興に關する詔書煥發さる
○昭和三年……今上天皇即位の大禮を行はせらる

大正十二年關東大震災の後、下し給ふた詔書には、

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭
激ノ風モ亦生ス、今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル
と仰せられ、「文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツ」と宣せられた。而し
て今この上下協贊振作更張の時に方り、宜しく教育の淵源を崇び、智徳の竝進を
努め、綱紀を肅正し、風俗を匡勵し、浮華放縱を斥けて、質素剛健に趨き、輕佻
詭激を矯めて醇厚中正に歸し、人倫を明にし、親和を致し、公德、秩序、責任
節制、忠孝、義勇、博愛の諸徳を遵守し、入つては恭儉勤敏業に服し産を治め、
出でては一己の利害に偏せず、力を公益世務に竭し、以て國家の興隆と民族の安
榮と社會の福祉とを圖るべしと御諭しになつたのである。

常に身體の健康に注意せよ

○明治四十二年……歩兵操典公布さる

○大正十二年……世界平和會議をワシントンに開く(一九二一年)

世には勤勞することを苦勞なりと思ふ人と勤勞ほど愉快なるものはなし
と観する人とある。此の差違は如何にして生ずるかといふに、之を精神
上より見れば人生觀の相違によるものであり、之を物質上より見れば健康の如何
に由るものである。世人は勤勞の大切なることを知らないでもないが、病弱の
人々は勤勞ほど苦痛なるものはあるまい。之に反して身體強健の人には、有益な
る仕事に従事する程愉快なることはなからう。人生を悲觀するも亦樂觀するも、
人の健康によることの多きを知らば、神より賜りたる此の健康を常に失亡せざる
よう注意し、此の健康によつて人を助け、國を益し其の人の働きによつて少しに
ても人間の幸福を増進することが出來たならば、これほど愉快にして面目あるこ
とはあるまい。精神の修養と共に身體の健康を増進することを忘れてはならぬ。

この蟻に恥ぢざるなきか

○昭和八年……二宮尊徳の主義を奉ずる報徳社を創立す
○大正元年……横濱沖の観艦式に初めて飛行機参加す

路傍に於てふと黒く細長い何ものかを認めた。それは夥しい蟻の行列であつた。長く長く一列縦隊を作り、古巢を棄て、新しい場所へと移動しつゝあるのである。溝の端から、廣い原を横ぎり、道路を林断して延々とつゞいてゐる。先頭は遂に小川の所に出た。今迄のやうにすん／＼と前進するわけに行かなくなつた。ためらつてゐたが、何を思つたか先頭の若干が川の中に飛び込んだけれども直ぐ川の流れて見えなくなつた。ついで又飛込んださうしてゐるうちに、或るものは到頭向岸に泳ぎついた。それにつながつて流れに押されながらもこちら側まで一筋に連続してしまつた。後から来る蟻はその水中の蟻の橋を渡つて何なく對岸に渡ることが出来た。最後の蟻が渡り終つた時、今まで橋の代りになつてゐた蟻共は水の流れて行手も知れずになつてしまつた。

人は中庸を以て道とする

○嘉永四年……世界最初の海底電信英佛間に開通す（八五一年）
○明治六年……火焙磔の刑を廢止す

二宮尊徳の言葉の中に、凡そ物毎には度と云ふ事あり。飯を炊くも料理をするも、皆宜しき程こそ肝要なれ。我が方法も又同じ世話をやかねば行はれざるは勿論なれども、世話を焼過ぎると又人に厭はれ、如何にして宣しきか分らず、先づ捨て置くべしなど、云ふに至るものなり。古人の句に「咲き過ぎて是れさへいやし梅の花」とあり。云得て妙なりとある。例へば勉強をするにしても、度を過せば、却つて健康を損する。運動大いに結構である。けれども之にばかり身を入れ過ぎると肝腎な勉強がお留守になる。子供を可愛がるにしても、可愛がり過ぎて愛に溺るれば、却てその子のためにならぬ。さうかと云つて叱り過ぎて又子供はいぢけて了ふ。行爲も思想も、すべて右せず左せず、中庸を以て尊しとする。

日四十月一十

日の恩やたちまち碎く厚氷

○明治三十年……ドイツ艦隊膠州灣を占領す
○昭和五年……濱口雄幸東京驛に遭難す

赤穂浪士の一人、大高源吾は風流の士であつた。俳諧をよくし、又茶道の心得もあつて吉良邸に出入する茶人羽倉齋と交つて吉良邸の内情を探つた。また俳人其角とも親交があり、源吾が煤竹賣りに身をやつし、江戸市中を歩いてゐる時、打入の前日兩國橋の袂で、パツタリ其角に出會つた。其角は源吾の心をそれと察して「日の恩やたちまち碎く厚氷」と一句を読み與へた。源吾は早速「明日またるゝその寶船」と返句をしてひそかに訣別の意を表した。其角と云へば、雨乞ひの其角で有名なもので、或る年、早魃つゞきで隅田川一帯の人たちが雨乞ひ騒ぎをやつてゐる所に通り合はせ、人々に乞はれて雨乞ひの句を讀んだ。「夕立や田をみめぐりの神ならば」といふ一句を三圍神社の社前に捧げると、俄然、車軸を流すやうな夕立が降つたといふ。

日五十月一十

親は子のために迷ふ

○明治十九年……萬國赤十字條約に加盟す
○明治三十七年……旅順の露艦隊全滅す

親ゆゑに迷うては出ぬ物狂ひ——といふ川柳がある。謡曲や舞踊などでは狂亂した人のことを物狂ひといひならはしてゐる。「お夏狂亂」などの舞踊も物狂ひである。謡曲では「隅田川」でも「三井寺」でも或は「櫻川」でも子供の行方を探すために親は氣違ひになつて了ふ。即ち物狂ひである。例へば隅田川では梅若丸が人買に渡はれて行方不明になつたのを、その母がたづね歩くうち、とう／＼心痛の餘り物狂ひになつて仕舞ふところを仕組んである。この川柳の意味は、親は子ゆゑに遠國までも出かけ、氣も狂亂してさまよひ歩くためしも多いのであるが、子が親ゆゑに氣違ひになつてさまよひ歩いたといふためしを聞いたことがない。親が子を思ふほどに、子は親を思はぬものかと慨いてゐるのである。「孝行をしたい時には親がなし」といふのでは時既に遅いであらう。

方便の爲の懺悔は懺悔でない

○安政五年……西都隆盛、月照と薩摩の海に投ず
○大正三年……青島入城式を行ふ

「嗔も方便」といふが、懺悔は決して方便ではない。懺悔には自から三つの要素がある。第一に自己を分裂せしめて我が行爲を心の奥の佛性の光に照らし見、第二に其の事の罪深きを自覺し、第三に佛の御力によつて救はるの理想がなければならぬ。よし罪惡を自覺したからとて、救はるゝ理想のない時は自暴自棄になつてしまふ。自暴自棄は決して自ら治むる所以でない。自ら治むるには自己の獨立を害する惡念妄想を却け、自分の領土を扶殖する善念眞智を開發せなければならぬ。これ即ち精神上の自治に於て缺くべからざる要素である。佛敎では惡を去り善に就き、我が心をして清淨ならしめて行くのが、これ佛敎の根本修行と教へてある。此の修行あつて初めて精神上の自治も出來、我も佛も異りなき獨立獨尊の人となることが出来るのである。——(加藤咄堂「修養百話」より)

我が身をつねつて人の痛さを知れ

○明治三十八年……伊勢大廟に平和克復を奉告し給ふ
○明治三十八年……伊藤博文韓國保護條約を締結す

情の最も美しきものは則ち同情である。基督の愛、孔子の恕、孟子の仁釋尊の慈悲、煎じつめれば則ちこの同情、おもひやりである。我が身をつねつて人の痛さを知れといふ諺にもある通り、この心があつたならば、家庭も社會も圓滿に收まる。如何なる堅い氷でも、春風には溶けるが如く、どんな頑固な人でも、同情を以てこれに對すれば解けないことはない。この心は一家にあつては親兄弟身内の者ばかりでなく、召使、雇人に對しても同じでなければならぬ。古歌にも「心せよ使ふも人の思ひ子ぞ我が思ひ子に思ひくらべて」とある。これは唯だ人間に對するばかりでなく禽獸に對しても持つてゐなければならぬ。「行水の捨てどころなし虫の聲」といふ俳句を、高杉晋作は俗語に直して、「てすりにもたれて化粧の水をどこへすてよか虫の聲」と唄つた。虫に對する同情である。

怒は愚に始まり後悔に終る

○明治二十九年……各騎兵聯隊に軍旗を授けらる
○明治三十一年……上野公園に西郷隆盛銅像の除幕式を舉ぐ

短氣は損氣と云ふ。損氣ばかりではないが、先づ損氣が多い。怒は愚に始まり、後悔に終るといふ諺がある。小さな事でも、大きなことでも、談判事は怒が交れば打ち毀しになる。世に喧嘩口論の絶えぬのを見ても、人の怒り易い事がわかるが、人は怒り易いだけ、之を戒むる事に努めねばならぬ。浅野内匠頭が殿中で吉良上野介に斬りかゝり、其の罪で切腹の上、お家断絶となり、家臣は更に吉良の家に入りて之を殺し、邸内の死傷又おびたゞしく、ついであつたら一粒選の武士四十六人の命をも亡きものにしなければならなくなつた。大變な騒ぎであつたが、事の起りはといふと一徹短慮の長矩公、怒心頭に徹して辛抱がして居れず、吉良上野介に皮下何センチ、全治何週間かの輕傷を負はせたといふことに過ぎなかつた。あれが事なく納つたなら忠臣蔵もないわけだ。

忍耐は遂に成り難きを成さしむ

○文政十一年……小林一茶歿す、年六十五
○明治三十年……陸軍軍樂隊を定む

忍耐とは一時のつらさ、苦しさ、怖ろしさ、悲しさ、寂しさ、はづかしさ等を忍ぶ心乃至一時の遊びたさ、なまけたさ、褒められたさ、すかれたさ、食ひたさ、飲みたさ等を耐へる心にはじまつて、貧苦に安んじ、艱難に安んじ、世に知られざるに安んじ、死に達して極まる。何と、忍耐といふ徳も浩大なものではないか。訥辯から古今無雙の雄辯家となつたデモスセネスも、自活獨修して大學者となつたフランクリンも、徐ろに時機の到るを待つた家康も、草履取から經上つた秀吉も、四十日斷食のキリストも、十一年苦行の釋迦牟尼も、九年面壁の達磨大師も、「勿體なや祖師は紙子の九十年」といはれた親鸞上人も、いづれも皆此の意味の忍耐を種々の方面、種々の時期に幾たびも幾たびも經て、夫の事業、夫々の目的、夫々の心願に到達された偉い人達であつたのだ。

その手てお釋迦の顔なてる

○安政五年……福澤諭吉福澤塾を開く

○昭和十一年……尾去澤鑛山のダム崩壊して惨事起る

おさへても堪忍袋なかりせば何にか入れん疝癪の虫——と歌つた曲亭馬琴は、憤怒について次のやうに記してゐる。怒る者は内空し、河豚に腹少き如し。寺に懸けたる大鼓は如何。鳴き喚くのみ。これも腹なし。夫れ闘雀は人を恐れず、蟬螂は事を避けず。一朝怒りに身を忘るゝは、これ小丈夫の所爲にして、世に馬鹿者といはれんのみ、盗跖、孔子を罵れども、孔子の聖たるに害なし。藏倉、孟軻を誚れども、誰か孟軻を賢ならずとせん。己れ是にして、人の非なるを知らば、争ふ所なかるべく、彼れ是にして、我れ非なるを悟らば、負けて過ちを改むるに如かず。柳の枝に雪拵なく、いと鋭き刃は缺くることあり。堪忍五兩の廉なるは、古人の算盤違ひなるを、多く買はまく欲せずや」と。堪忍五兩負けて三兩の諺があり、「その手てお釋迦の顔撫でろ」といふ諺もある。

短氣を治すに妙薬あり

○天明三年……佛國にて初めて輕氣球を浮揚す(一七八三年)

○明治二十八年……征臺軍東京に凱旋す

或る人去る醫者の所に來て、わたくし生得短氣にて、腹が立つときは後先かまはず、燃え立つ火にさへ飛び込むかも知れぬ。何とか癒してもらふ工夫もないものでせうかと尋ねた。成程、阿房につける薬はないといふけれども、お前さんはまだ少し脈がある。さりながら短氣を生れつきなどは付ける薬もない一言、短氣が生れつきのものならば、たつた今此處に出して見なされ、出まいがな。短氣といふものは上に向つては出ぬものぢや。人によつて發り、人によつて發らざる短氣を、生れ付だと思つて捨て置けば、その病は益々重るばかり道を歩いてつまづいてそれで短氣が起るか此の阿房奴と重ねかゝつて罵れば、其人額に青筋立て腹を立てた。そこで醫者はすかさず「それ〜その腹立をお止めなされ、それが短氣を治す妙薬ぢや」と申された。

如何なる兵器も精神には勝てぬ

○大正二年……徳川慶喜歿す、年七十七

○大正九年……皇太子殿下全國青年團に令旨を賜ふ

外國船に乗つてヨーロッパへ行くと、よく見ることだが印度洋などでは航海の熱さに外國の水夫共は朝からビールやサイダーをがぶく飲む。そんな時日本の水夫なら水を飲んで働く。日露戦争の時でも、ロシア人は毎日本茶を飲まなければ働けぬといふ。将校などは三鞭酒が無ければ戦争が出来ぬといふイギリスのトランスヴァールの戦争などはまるで獵場に行つてゐるやうな贅澤な有様であつたさうだ。其處へ行くと日本の軍人は眞剣だ。軍隊の方では成るべく給養を好くしようと努めるのだが、軍人は豫て困苦缺乏に堪へる様鍛へてあるから、梅干一つでも我慢が出来る。飲まず食はずで三晝夜でもぶつ通す。平素の習慣と訓練と、さうして精神の持ち様一つであるが、到底こんな眞似は外國人には出来ない。日本の軍隊の強いのは決して科學の力ばかりではない。

貯蓄あれば狼狽せず

○寶永四年……富士山噴火して寶永山を生ず

○明治三十八年……韓國統監府京城に設置さる

江戸ツ子の生れ損ひ金を溜め——といふ川柳がある。江戸ツ子の浪費性を讚美し、たま／＼貯蓄心のある心がけのよい者があれば生れ損ないなどと罵る、とんでもない心得違だ。江戸ツ子滅亡の原因の一つは確かにこの貯蓄心のなかつたことにある。山來日本人は經濟生活に於て無方針である。入るを計つて出づるを制するといふ財理の法則を知らぬ者が多く、とかく金錢を卑しみたがる氣風がある。「ケチケチするな」といふタンカは金錢の出しっぶりの悪い人をやつける時の言葉から始つてゐるが、一定の收入から、少しでも餘計に貯蓄しようとするにはケチケチしないであらうか。貯蓄ほど人の生活を力強くするものはない。貯蓄は一つの習慣である。若い時からこの習慣を養へば、貯蓄しないではゐられなくなるものだ。残つたら貯蓄しようなどと思つては貯蓄ものでない。

時間じかんの觀念くわんなき者は野蠻人やばんじんにひとし

○明治二十三年……第一回帝國議會を召集す

○昭和五年……女流飛行家ブルース立川に着陸す

スペンサーがいうた如く、智能ちのうの發展はつてんは時間じかんと空間くうかんに適應てきおうするものである。智能ちのうの程度ていどが低ひくければ低ひくいほど、時間じかんに關くわんする思想しきうが乏たぼしく、又また場所しよに關くわんする思想しきうが狭せまい。子供こどもについて見るとそれがよくわかる。幼少えうせうの時には今日こんにちと明日あしたとの區別くわくべつさへ分わからぬ。又また次つぎにある横町よこまちのことまでも考かんがへ及およばぬ。稍やう々せ成長せいせい長ちやうするに従したがつて明日あした、明後日あしたといふことがわかつてくる。一丁四方位ちやうほうぐわいのことも分わかつて来る。更さらに成長せいせいして、來年らいねん、再來年さいらいねんのことも大凡想像おほぼとせうざうがつき、十里先じゆりせんのことも一通り話はなしがわかるやうになる。野蠻未開やばんみかいの人種じんしゆが丁度ちやうどそれと同じである。智能ちのうが發達はつたつすればするほど、時間じかんと空間くうかんに對たいする思想しきうはますます長ながく且かつ廣ひろくなつて来る。宵越よなごしの金かねは持もたぬ、明日あしたのことは明日あしただといふ、見先めさきばかりの考かんがへを持つ人ひとがあつたら、それは智能程度ちのうていどの最も低ひくい人の思想しきうで、全まったく野蠻人やばんじんとひとしい。

人間にんげんと禽獸きんじゆうの差別さべつは何なにか

○明治三十六年……上野品川間電車開通す

○大正十年……皇太子(今上天皇)攝政に御就任あらせらる

人間にんげんと禽獸きんじゆうと一體たいどこが違ちがふのか。人間にんげんには言語げんごがあるけれども、動物どうぶつには言語げんごがないといふ。果はたしてさうであらうか。言語げんごとは、自分じぶんの考かんがへを聲こゑに表あらはしたものである。然しからば、犬いぬや猫ねこや鳥とりでさへもそれが出来る。喜怒哀樂きどあいらくを聲こゑに出だすことが確たかに出来る。彼等かれらにも言語げんごがあるのである。只ただその意味いみを十分人間じぶんに聞き分わけられない丈だけだ。或あるはいふ。人間にんげんには心こゝろがあるけれども、鳥とりや獸けものにはそれが無い。これが人間にんげんと禽獸きんじゆうとの違ちがふところであると。果はたしてさうであらうか。一寸すんの虫むしにも五分ぶぶんの魂たましひといふではないか。心こゝろとは智情意ちじやういの働はたらきであるが、鳥とりや獸けものにも、不完全ふくせんながらその働はたらきが具そなはつてゐる。さう考かんがへて來くれば、人間にんげんと禽獸きんじゆうとの區別くわくべつは中々なかなかむづかしい。其處そこに陶冶とうたされた人格じんかくと、敬虔けいけんなる信念しんねんと向上發展かうじやうはつてんする智能ちのうとがなければ、人間にんげんとしての存在價值そんざいかちは零ぜろになつて了しまふ。

地獄も極樂も我が身にある

○明治四十四年……小村壽太郎歿す、年五十七
○昭和十一年……日獨防共協定調印さる

昔、江州彦根の藩士に一人の佛教信者があつた。どう考へても地獄極樂の有り無しが腑に落ちないので白隠禪師の處へ尋ねに行つた。すると白隠禪師は、何ちや侍のくせに、坊主の心配することまで氣にかけなくてもよろしい。そんなことでは到底立派な武士にはなれない、お前は一生なまくら武士で終るだらうよと散々に毒づかれた。あまりのことに堪へかね、満面朱の如く憤り、一刀の鞘に手を掛けて、己れ白隠眞ッ二つと詰め寄つた。白隠は一目散に逃げ出した。逃げるを後から追ひかけて、スラリと一刀抜き放つ。「オットそれが地獄ちや地獄ちや」と白隠は逃げながら叫んだ。ハッ、と我に歸つた武士は、刀を鞘に收め、平謝りにあやまつて、再び禪師の教へを乞うた。その時禪師はからりと笑つて、「イヤサ、それが極樂ちや」と答へた。

己が本心を見失なふな

○明治十年……本邦最初の鐵道敷設六郷川鐵橋成る
○昭和十一年……陸軍最初の少年航空兵卒業式を行ふ

智の反對は愚痴、仁の反對は瞋恚、勇の反對は貪慾となる。此等貪瞋痴の三惡を去つて智仁勇の三德を出すのが達德である。一言にして云へば我々は何事をするにも誠の心を持つて行けばよい。ある所に菓子屋をしてゐる夫婦があつて、それが取つ組み合の大喧嘩をしてゐる。亭主は女房を殺してしまふとどなるし、女房は亭主を殺して了ふとわめてゐる。近所の人が寄つてたかつて止めやうとするけれど、中々止まらない。門先には一杯の人ばかりである。そこで一人の仲裁人は店先に行つて、そこに列べてある菓子を掴み出し、今こゝのおかみさんが殺されるさうだから功德のための供養ちやとばかり人々に投げ與へた。亭主は初めてそれに氣がついて、「オイ、そんなことをされちや商賣にならぬぢやないか」と思はず女房を離して喧嘩を止めた。これが本心である。

貞操は女性の金城鐵壁なり

○弘長二年……親鸞上人歿す、年九十

○永正十七年……マゼラン初めて太平洋に出で太平洋と命名す(一五二〇年)
女性の貞操は、男性が女性に課する重税である。男性が女性を我が物件視し、我が所有物視する爲めの極印であり、燒判であるとは、現代の所謂新人の説くところであるが、然も貞操は他よりの強制的のものではない。我々自發的のものである可きである。女性は多くの能力に於て男性と對立するに困難だ、但だ貞操の武器によりて女性本來の面目を維持することが出来る。されば貞操は男性が女性に課したる義務と云はんよりは、女性が男性に對する自衛の權利と云ふが正當である。女性は弱し。貞操によつて強し。貞操は女性に取つて金城鐵壁だ。女性の貞操觀念の旺盛は、やがて男性貞操の向上の機縁となる。此の如くして夫婦の道は行はれ、此の如くして家庭の神聖は保持せられ、此の如くして家族制度は萬古不易、國家と與に悠久堅固の制度として長存する。(國民小訓)

己を知れ而して自國を知れ

○明治二十三年……第一回帝國議會開院式に車駕親臨あらせらる
○明治三十九年……年賀特別郵便規則公布さる

己を知ることには總ての人間の學問の第一義である。されど己とは我が一身一個の事のみには限らぬ。我は一個人として生活するものではない。家もある、國もある、世界もある。己を知るには家をも知らねばならぬ。吾が國を知らねばならぬ。吾が世界をも知らねばならぬ。吾身を知る必然の順序として誰しも吾家に就て知らぬものはない。若し吾家の何物であるかを知らない者ならば、それは全く浮浪者だ。若し吾國の何物であるかを知らない者ならば、それは全く非國民だ。若し世界の何物であるかを知らない者ならば、それは全く世界市民たる資格がない。今日の人類進歩の程度に於ては國は人類集團の極致である。その國を愛し、その國に盡すには、先づ吾國の何物であるかを知らねばならぬ。能く知らねばならぬ。之を知るは之を愛し、之に報ゆる前掛である。(同前)

禍福は糾へる繩の如し

○明治三十八年……京城の列國公使館撤退を始む

○昭和七年……在滿日本大使館を開く

蜀山人の歌に「世の中に歎きはなきに喜を求めて遂になげきとはなる」といふのがある。幸福と不幸とは紙一重の距りに過ぎない。「二宮翁夜話」の中にかういふことが書いてある。「禍福二つあるにあらず、元來一つなり。近く警ふれば、庖丁を以て茄子を切り、大根を切る時は福なり、若し指を切る時は禍なり。只柄を持つて物を切ると、誤つて指を切るとの違のみ。夫れ柄のみあつて刃無ければ庖丁にあらず、刃ありて柄なければ又用をなさず。然して指を切る時は禍とし、菜を切る時は福とす。されば禍福といふも私物にあらずや。水もまた然り、畔を立て引けば田地を肥して福なり、畔なくして引くときは肥土流れて田地瘦せ、其禍たるやいふべからず。富は人の欲する處、然りと雖も、己が爲にするときは福是に隨ひ、世の爲にする時は福是に隨ふ」と。

自彊息まさるべし

○明治六年……始めて郵便葉書を發行す

○昭和五年……始めて防火デーを行ふ

自彊息まさるべしといふことは、自ら勉めて息まず、如何なる辛い事でも憂きことでも、の爲に怯むことなく、國家の發展と社會の爲に、日進の大勢に伴ふべく無限に努力することである。我は日本國民として國民たるの務めを盡すと云ふことを土臺として、どのやうな困難があつても、その爲に撓まず怠らず、進んで行くのが、即ち自彊息まさるべしである。ところが今の人間は大概自彊息むのかたちである。例へば近來の流行に成功といふのがある。成功と云ふのは出来上つたといふことである。ところが成功した、これで出来上つたと思つたならば其人はもう出来損つた時である。月は満つれば缺ける、爛慢と咲く花は散つてしまふ。是れで宜いと安心が付いた時、それは墮落の淵に沈む第一歩であるといふことを無寝にも忘れてはならぬ。 —(加藤咄堂「修養日記」より)—

日二月二十

皇道を世界に發揚せよ

○明治十五年……京橋上野間鐵道馬車開通す

○昭和三年……代々木練兵場に大禮觀兵式を行はる

自主外交とは國家が完全なる國家として其の機能を獨自一己の意思もつて國際上に行使するを云ふ。平たく云へば日本國は日本國として何れの國の牽掣をも受けず、自國の立場から見ても最も適當でありと認むるところを外交上任意に行ふを意味する。固より外交と云へば相手あつてのこと、相手とは他の一國乃至數國である。既に相手あれば我が思ふ様に參らぬは當然のこと。我に自由の意志あれば、彼にも自由の意志がある。自由の意志と自由の意志との立會であれば、詮ずる所は交譲妥協は當然の歸結とせねばならぬ。されば自主的外交といふも、決して傍若無人の外交ではない。國是と一致し、國民大多數の熱望と一致し、大義を世界に布くの鴻圖と一致する。別言すれば自主的外交は國民的外交にして、其の目的は皇道を世界に發揚する所以であらねばならぬ。(國民小訓)

日三月二十

價いた金では酒は飲めない

○明治五年……太陽曆採用により此日を六年一月一日と定む

○明治二十二年……警察官帶劍の制を定む

甲と乙と二つ竝んだ漁村があつた。甲村は窮乏であるにも拘らず、酒は飲む、博奕は打つ、一村悉くさういふ風な氣風の悪い村であつた。然し海に出てはよく稼いでゐた。稼いではゐるのだが、彼等に云はせれば、荒海に出て命がけで稼いだ金だ、酒でも飲まないでゐられるかといふのであつた。乙村は火事には見舞はれる、海嘯には襲はれる、甲村よりもつとひどい苦難の村だつた。村人はそれにもめげず、男も女も働き通して、めきくと復興して行つた。一村悉く酒も飲まなければ煙草も喫せず、誰一人夜遊びなどする者がなく、海にも出る、野良稼ぎもする、夜は夜でせつせと夜業を働んだ。彼等は口を揃へて云ふのであつた。「汗水垂して稼いだ金で酒など飲んでゐられるものか」と。斯くて十年が経過した。甲村の衰亡と乙村の繁榮とは比較にもならなかつた。

廉恥心なきものは恕すべからず

○明治三年……始めて書狀集箱及切手賣捌法を設く
○明治十七年……京城に事變起り我公使館焼かる

人として缺くべからざるものは廉恥心なり。廉恥にあらば、臆病者も勇氣を起し、意氣地なきものも元氣を生じ、賤しき根性を去り、下劣なる事を爲さず、以てよく紳士の體面をたもち得べきなり。もし廉恥心を失ひて、鐵面皮漢となり、あばずれ者となり、俗に所謂蛙の面に水となり了らば、最早その人は駄目なり。人には長所あると共に、また缺點あるものなり。多くの缺點はその長所に免じて恕し得べきものなれど、たゞ廉恥心なきものは、如何なる長所あるも、決して之を恕すべからず。廉恥心なきものを、上に蔽くべからず、下に遣ふべからず、廉恥心なき者と共に事を爲すべからず、共に酒を飲むことだにすべからず。余以爲く廉恥心は人をして道德的動物たらしむる最も大なる原動力なりと。而して余は名譽心よりもむしろ廉恥心を奨励せんと欲す。
(處世訓)

大事をなすとも小事を忘るな

○慶應二年……徳川慶喜征夷大將軍となる
○明治十一年……參謀局を改め參謀本部設置さる

二宮尊徳曰く、聖人は無慾ならず、其の實大慾にして、其大は公明正大なり。賢人之に次ぎ君子之に次ぐ。凡夫の如きは小慾の最も小なるものを充足せしめ、人身に大福を集めん事を欲するを云ふ。即ち國家を經濟して、人民の幸福を増進するにあり。大事をなさんと欲せば、小事を怠らす勤むべし。小積りて大となればなり。凡そ小人の常、大なる事を欲して小なる事を怠り、出来難き事を憂ひて、出来易き事を勤めず。夫故終に大なる事をなすこと能はず。大は小の積んで大となる事を如らぬ故なり。譬へば百萬石の米と雖も、粒の大なるにあらず。萬町の田を耕すも、その業は一鋏づゝの功にあり。千里の道も一歩づつ歩みて至る。小なる事を忽にする者、大なる事は必ず出来ぬものなり。

勤王の倡主復古の指南

○元祿十三年……水戸光圀歿す、年七十三
○寛政十一年……大日本史紀傳八十卷成る

徳川光圀は、大いに尊王の精神を發揮し、明暦三年、『大日本史』編纂の事業に着手し、史局彰考館を水戸に設け、多くの學者を招聘して、この事に従はしめ、爾來幾十年、光圀生涯の心血をこれに注がれた。されば徳川時代の尊王論は水戸にその源を發し、のち次第に遠く且つ廣く流れて四方に勤王の士を喚び起すことゝなつた。幕末の頃、徳川齊昭出で、光圀の遺風を發揚し、正氣の歌の作者たる藤田東湖や、會澤安明などの諸名家が現はれて、所謂水戸派の學を以て世道人心を警醒したのも、皆、光圀にその起源を發してゐる。晩年、常陸太田の西山に居を卜し、簡素質實な生活を送り、元祿十三年十二月六日、七十歳を以て歿した。明治三十三年正一位を追贈あらせられ、明治天皇は詔を賜うて「洵に是れ勤王の倡首にして實に復古の指南たり」と仰せられた。

自惚に自信あらしめよ

○慶應三年……兵庫開港大阪開市勅許さる
○明治四十年……韓國皇太子來朝す

自惚と瘡氣の無い者はないといふが、その自惚も自ら知つてこれを鞭撻すれば、自惚なきにまさる。豊臣秀吉の自警箴の一つには「何事も人なみになれ」と云つてあるが「何事も人なみにはなれる」といふ自惚なら、さういふ自惚は持つてゐた方がよい。自から輕んじ、自から侮るのみが能ではない。元より自惚だけで、勉強もせず努力もしないのでは、到底箸にも棒にもかゝらないが、自惚の度に應じて、奮勵努力し、罪勉倦まざるに於ては、やがて自惚は自惚の域を超えて、自信となり、自尊心となる。古來一技一能にすぐれた人は、必ず自ら矜持する所があつて、徒らに卑下してばかりはゐないものである。只、修養ある人は、之を心に收めて形にあらはさず、妄に威張らず偉らがないけれども凛然として侵すべからざるものがある。自惚と自信とはこゝに實力と一致する。

日八月二十

人の善悪は必ずしも世評と一致せず

○昭和九年……日米國際無電開通す

○昭和十年……大本教大檢舉さる

「あの人は面白い人だ」と言はれる人も實は淺薄なお調子者や、上すべりの輕薄者だつたりする。「あの人は好い人だ」と言はれる人も、萬事褒める側に取つて都合のよい、狡る賢い人だつたりする。西川如見の『町人囊』の中には「人の見る事よけれ共、天の見る事悪しきあり、人の見る事悪しけれども天の見る事よきあり。聖人の世にも人を知る事難しとす。沉んや末代に於てをや今諸人の譽むる人あるを、いかなる善人にやと尋ね見る時は、さして善行もなし又諸人の譏り惡む人あるを、いかなる惡人にやと尋ねる時は、さしたる惡行もなし。——世間の毀譽褒貶に依つて、人の善悪は定めがたき理なり。天の見る所をつゝしみ、天の見る所にしたがふは、君子の意にして、一旦譽なしといへ共、其實、後世に著はる。小人の譽れ何ぞ久しかるべき」とある。

日九月二十

過ぎたるは猶及ばざるが如し

○大正五年……夏目漱石歿す、年五十

○昭和十年……五國海軍々縮會議をロンドンに開く

夏目漱石の文章とよく似たものに、伊達正宗の聖書と傳へられる言葉がある。

仁に過ぐれば弱くなる。

義に過ぐれば固くなる。

禮に過ぐれば詔となる。

智に過ぐれば嘘をつく。

信に過ぐれば損をする。

これは、仁・義・禮・智・信の調和を説いたものである。諺にも「過ぎたるは猶及ばざるが如し」といつてある。「寒からぬ程に見ておけ峰の雪」、風流にも限度があるやうに、人の行ひにも亦自ら限度がなければならぬ。

日十月二十

學藝を振ひ國運を伸張せよ

○大正五年……大山巖歿す、年七十五

○昭和三年……教育振興に關する御沙汰を蒙る

昭和三年十二月十日、時の文部大臣勝田主計は御召によりて宮中に参内し、御座所に於て天皇陛下に拜謁仰付けられ、左の如き優渥なる御沙汰を拜受したのである。

御沙汰

祖宗ノ國ヲ經スルヤ教學ヲ先ト爲ス皇祖考夙ニ學制ヲ頒チ更ニ宸勅ヲ昭ニシ教育ノ大綱ヲ示シタマヘリ皇考遺諸ヲ承繼シ又聖諭ヲ降シテ先朝ノ洪範ヲ申明シタマヘリ朕今列聖ノ遺圖ヲ嗣キ篤ク教化ヲ敷キ以テ人心ノ歸趨ヲ正クシ大ニ學藝ヲ振ヒ以テ國運ノ伸張ニ資センコトヲ念フ局ニ教學ニ當ルモノ其レ能ク朕カ意ヲ體シ夙夜淬勵祖宗ノ大訓ヲ光昭ニセンコトヲ務メヨ

日一十月二十

根氣は一切に勝つ

○正保二年……澤庵禪師歿す、年七十三

○明治二十一年……東京美術學校を設立す

勝海舟の言葉の中にこんなことがいつてある。「世に處するには、どんな難事に出會つても臆病ではいけない。さあ、何でも來い。おれの身體がねぢれるならねぢつて見る、といふ了見で事を捌いて行く時は、難事が到來すればする程面白味がついて來て、物事は雑作もなく落着してしまふものだ。大膽に無用意に、打ちかゝらなければいけない。どうしよう、かうしようと思案してかかつては、いけない。難しからうが、易しからうが、そんな事は考へずに、所謂無我といふ眞境に入つて無用意に打ちかゝつて行くのだ。もし成功しなければ、成功するところまで働き續けて、決して間斷があつてはならぬ。世の中の人は大抵事業の成功するまでに、根氣が盡きて了ふから、大事が出来ないのだ。根氣が強ければ、敵も遂には閉口して、味方になつてしまふものだ」と。

日二十月二十

人を率ゐるには徳を以てすべし

○明治二十二年……東京に公衆電話開通す

○昭和十一年……蔣介石、張學良のために監禁さる

大山巖大將が、日露戦役に満洲軍總司令官に任ぜられた時、戦線には野津、奥、乃木、黒木、川村の諸將軍があつて、夫々の指揮に當つてゐた。時の海軍大臣山本權兵衛大將は大山大將に、内地にとどまられることをすゝめたが、大山大將は「各軍司令官はいづれも一世の英雄、他の者ではとても統御が出来ぬ」といはれた。成程、あれだけの將軍達が、各々の立場に立つて指揮をする場合、これを統帥して一絲亂れざる作戦を遂行するのは容易なことではなかつた。智謀や豪勇丈けでは到底統御は出来ない。人の長たることは中々難しいものである。まして一世の英雄といはれる將軍達の上に立つてこれを統帥することは、至難中の至難である。その難局に立つて、總司令官の大任を完うされた大山大將は、智と勇に加ふるに人間の徳を圓滿に兼ね備へてゐられたのである。

日三十月二十

些々たる事にも氣をつけよ

○萬治二年……江戸淺草川に兩國橋を架設す

○昭和八年……東京中央卸市場新設さる

「誰れかある。」信長は夜中宿直の近習を呼んだ。ハツと應へて、御前に出て見ると、「いや格別用はない、下れ」といはれる。すごと引退るとまた「誰ぞ参れ」と呼ばれる。代り合つて次の者が罷り出る。やはり、用はないといつて追返へされる。幾度も空しく引下つたが、最後に呼ばれたのは森蘭丸であつた。ハツと應へて御前に伺候すると、これも同じく「格別用はない、下れ」といはれた。蘭丸は引退らうとして、ふと疊の上の座が一筋目についた。蘭丸は靜かに掴みあげて懷紙に包み、そのまゝ出て行かうとした。信長は始めて、「あ、それだそれだ」と聲を上げて、蘭丸の注意深さを賞めたといふ話がある。よく會社の採用試験の面會日に、わざとその入り口に、紙を落してある事がある。その紙を踏付けるか股いで來るか、拾つて來るかで、もう採否は極るのである。

忠にして能く勇なれば國難清し

○元祿十五年……赤穂義士吉良邸に討入る

○慶應三年……王政復古を列藩に布告し給ふ

浅野内匠頭長矩が殿中に吉良上野介を傷けて切腹仰付けられたのが元祿十四年三月十四日、その翌十五年十二月十五日大石良雄以下赤穂浪士四十七名、本所松坂町の吉良邸を襲うて主君の仇を報じた。内一名、寺坂吉右衛門は大石の密命を受け、廣島の浅野長廣に報告するため、事變直後その場から出發したので残る四十六人、諸大名にお預けとなつた。天下泰平にして士氣頹廢せる折柄、いたく人心を刺激し、義士の忠勇を讃へて無罪を論ずる者が多く、將軍綱吉も同じ考へであつたが、國法は曲げられず、同十六年二月四日一同に自刃を命じた。明治元年、大帝、東京城に入御の後、十一月五日勅使を泉岳寺なる良雄等の墓前に御差遣あらせられ、「汝良雄等、固ニ執主君之義、復レ仇死ニ于法、百世之下、使ニ人感奮興起、朕深嘉賞焉」といふ誠に有難い勅語を下し置かれた。

善言は耳に痛し

○明治十七年……東海鎮守府を横須賀鎮守府に移改す

○明治三十九年……年賀郵便特別取扱を開始す

備前三十二萬石の領主新太郎少將池田光政は、德行すぐれた大名であつた。或る時、家老等と共に『考經』を讀んで『争臣』との章まで來ると光政は一同を見まはし、「こゝは大事なところだ。君臣の別はあつても、心は一つでなければならぬ。予に若し間違があつたら、遠慮なく諫言をしてくれ。予は喜んでそれを聞く」といつた。すると家臣の中川權右衛門が進み出で、「恐れながら諫言をお赦し下さるでございませうか」と念を押した。「勿論。予の頼みである」と光政は答へた。そこで權右衛門は形を改めて、「然らば何よりも先にお顔をお和げ遊すように」と思ひ切つて諫言した。光政は小さい時危瘡に罹つて顔が見にくく、眼光が強くて、機嫌の悪い時などは、恐ろしい形相を現はすのであつた。光政はさういはれて成程と感じた。以來、顔色を和げることには意を用ひた。

日六十月二十

兄弟相和せよ

○明治二十三年……東京横濱間に電話交換を開始す
○明治四十二年……東京山の手線電化す

林子平の『父兄訓』に曰く、人の兄と成ては、其弟を愛して其の知らざるを教へ、其足らざるを補ひ、あはれみ睦む事、兄の持前なれども、世上の兄多くは道知らざる故、弟をば只嘲弄物にして、猿あつかひにする者多し。然る故に弟たる者も兄を敬ふことを知らずして、却て恨み怒つて、兄弟不和を生じ、甚だ見苦しき也。これ弟の兄を敬はざるより始まる様なれども、其根本は兄たる者、弟を嘲弄するより事起れり。又兄たる者、弟を嘲弄するは、全く父の仕込様あしくして、兄たる者に兄たるの道を教へざるより事起る也。愚なる兄は徒に弟に誇る事のみを知つて、弟を愛するの道知らざる也。其譯は、弟の方よりは兄と敬うて、父同様に尊敬せされば其兄満悦の心なし、然らば己も弟を見ること子の如くする筈なるに多くは其弟を猿の如く取扱ふなりと。

日七十月二十

病に勝つには馬鹿になれ

○明治二年……大學校を大學と改稱す
○大正五年……大山元帥の國葬を行ふ

病氣をしてゐると障らなくても良いことまで癪に障るものだ。身體の弱いために人生の暗い方面だけを見る。食物がまづくても癪だ、看護婦が癪だ、隣の人がスヤ／＼眠つてゐても癪に障る。病氣の恢復のためには、癪に障らぬ工夫をすることが肝要である。癪に障らなくなる一つの方法は、思ひ切つて馬鹿になり切ることである。もう一つは、うんと賢くなることである。その中途半端は不可ぬ。どちらかといへば、馬鹿になる方がなり易い。自分のやうな値打の無い者も、看護婦が世話して呉れる。醫者が診て呉れる。有難いことだ。この有難いといふ氣持が湧くと病氣は癒つてくる。それは結局宇宙の力、即ち神の力に同化することだ。人間としては馬鹿になり、神の子として賢くなる工夫が出来れば病氣は癒る。

—(賀川豊彦「處世讀本」より)—

日八十月二十

褒貶相半ばすれば正し

○明治四年……華族士族に商賣を許す
○大正三年……東京驛開場す

徳川家光の前で、人々集つて、甲乙丙丁さまさまの批評をした。あの人は誰も褒めないものがあるかもしれませんといつたら、家光は、褒められるばかりで諒られることはないかと尋ねた。今一人の者が、言下に、決して誰からも諒られるやうな人ではございませんと答へた。すると家光は徐にかういつた。凡そとりどころのある者は、半ば褒められ、半ば諒られるものである。誰の氣にもいゝる者は、資性軟弱なものか、或は腹に一物ある奸佞の輩である。褒められるばかりで諒られることのない者は、要するに役立たずか善人でない證據だ。例へば訴訟を聞くにしても、一方が勝つて一方が負ける。負けた方はその奉行を悪しさまに諒る。勝つた方は、褒めそやす。これは人情の當然である。若し双方から褒められるやうな者だつたら、必ず曲事を行つてゐるものに違ひない。

日九十月二十

百難を突破して志成る

○寶曆元年……大岡越前守歿す、年七十五
○明治十年……東京帝國大學最初の卒業式を舉行す

熊澤蕃山は二十歳の時、中江藤樹の門に入つて學問を勉強したが、初め藤樹は容易にその入門を許さなかつた。冬のさなか、寒風に吹かれながら、軒下に坐り込んで、いつかな動かうともしなかつた。その根氣に感心してとらうとう入門が許されたのである。その翌年、彼の父が浪人になつたため、一家收入の途が絶え貧乏のどん底に陥つた。蕃山は毎日弟や妹をつれて山に木樵に行かねばならなかつた。そのため中々勉強が出来なくなつたのを歎いたが、藤樹は机にかじりついて、書物をいじりまはしてゐるばかりが修業ではない、貧苦に悩むことも、困難に陥ることも、災厄に苦しめられることも、皆修業であると訓へた。二十七歳の時、備前の池田侯に召抱へられることとなり「うきことの猶この上につもれかし限りある身の力ためさん」と一首を詠じて門出の決意を示した。

日十二月二十

身を殺して仁をなす

○明治元年……我國最初の洋式學校沼津兵學校開校す
○明治三十七年……三越呉服店設立さる

岡山孤兒院の經營者石井十次は世間の無理解と、あらゆる困難と貧乏とを乗り越えて一生涯を孤兒救済のために捧げた。明治二十四年十月、美濃地方の大地震の時には九十七名の孤兒を一手に收容し、三十九年の東北大饑饉の時には一時に八百名以上の孤兒を收容して孤兒總數千二百名に上つた。孤兒を養育するためには身邊一切の物は金に代へて孤兒の食物とした。時には着る衣物がなくて、赤毛布一枚で通した事もあつた。それでも彼は院兒に乞食のやうな眞似は絶対にさせず、二十年の長い間一度も行商に出さなかつた。彼は常に「人を相手にせず天を相手にする」といふ信念を以て一貫した。自分の病氣が重くなつて死期の近いことを知つた時、彼は愛する孤兒を一人々々尋ねて其將來を訓戒し、鞭撻しつゝ告別して去つた。かうして彼は死ぬまで孤兒のために盡した。

日一十二月二十

心ゆるすな片時も

○元祿五年……徳川光圀「嗚呼忠臣楠子之墓」を建つ
○明治三十八年……伊藤博文初代韓國統監に任ぜらる

伊藤一刀齋の處へ神子典膳が弟子入りをした時、一刀齋が典膳にいふには、これからお前に劍道を教へるが何時俺がお前を打込むか知れぬから其のつもりで居れ、よろしいか、ハイよろしうございますと答へた途端にピシヤリ、どうだ参つたかと早速やられた。こんな調子でそれからは庭を掃くにも、使に出るにも、「典膳一寸参れ」「ハツ」途端にピシヤリ、どうだ参つたかとやられる。お膳に坐つて御飯を食べてゐると、箸を持つ手をピシヤリ、寝るにも起きるにもいつ何時やられるかわからないので、典膳は明けても暮れてもこれを防ぐ工夫を凝して三年経つた。或る時火をおこしてゐると、後から鐵扇を打おろされた。ハツと身體を轉はした。一刀齋は、ウン巧いといひ様又打おろした。それを再び見事に轉はして「先生如何でござる」と得意になつた一瞬ピシヤリとやられた。

二兎を追う者は一兎を得ず

○明治三年……初めて陸海軍服制を定む

○明治十八年……新に内閣の制を定め伊藤博文首相となる

雄辯家として名高い政治家の永井柳太郎氏は、遂に廣田内閣の拓務大臣となり、再び近衛内閣の遞信大臣になつた人であるが、その以前には早稲田大學の教授と、大隈重信侯の主宰せる雑誌『新日本』の主筆を兼務し、傍ら政談演説のために屢々地方へも出かけてゐた。或る時、汽車に乗つて地方遊説に出かける時、偶然同じ車内に、元の西方大關で横綱の常陸山と乗り合せた。車中四方山の話のうち、常陸山が永井氏に、かう尋ねた。「失禮ですが先生の本職は何ですか。」永井氏は有體に「大學教授で雑誌主筆で、さうして政治家です」と答へる外はなかつた。すると常陸山は姿勢を改めてきつと言つた。「どれか一つにおきめなさい。」此の一言に永井氏の心は強く打たれた。以來政治家の一筋で身を立たしたが、この時の常陸山の言葉を終世忘れることが出来ぬと常に云つてゐられる。

機智よく人の心を捉ふ

○昭和六年……閑院宮殿下參謀總長に御就任あらせらる

○昭和八年……皇太子殿下御降誕遊さる

機智といふものは誰にでも必要なものだが、取分け政治家などには必要である。例へば演説をする時、其聴衆の中から奇抜な短評などを受けるそんな時若し當意即妙の警句に依つて其不意打に應戦する丈の機智がなければ、聴衆の感情を繋ぎ止る事は出来ない。嘗てジョセフ・チエンバレンがパーミンガムに於て關稅改革のために一場の演説をやつた。その時彼の言葉の中に、「自由貿易亡びずんば我國の製造業亡びん」と云ふ一句があつた。すると聴衆の一隅より俄かに聲あつて、「閣下亡びずんば我等勞働者亡びん」と叫ぶ者があつた。チエンバレンはこの時、ハタと演説を止めて、其聲の發せられた方に向直り徐かに言つた。「I hope you will live long, to be wiser.」(「余は君が長命せんことを希む。今少しく賢き人となる爲めに」と。 —(永井柳太郎「英人氣質の思ひ出」より) —

日四十二月二十

機智は無邪氣を要す

○明治三十年……庶人の佩刀を禁止す

○明治三十年……東京月島に無電の實驗をなす

昭和十二年から郵便切手が改正されて四錢切手には東郷大將の像、二錢切手には乃木將軍の像が印刷されることになった。時の逓信大臣は永井柳太郎氏であつた。ところが永井氏の小さい子供さんがお父さんに質問をした。同じ大將でありながら東郷大將が四錢で、乃木大將が二錢とはどういふわけですかと。さすが辯舌家の永井氏も此の奇問には何とも明答を與へることが出来なかつた。この事が新聞のゴシップとして傳へられると、或る日或る小學生から永井氏宛のハガキが届いた。それには、四錢と二錢になつたわけがお分りにならないさうですが、それはかういふわけです。東郷大將は「此一戦（一錢）」で名高い大將、乃木大將は「山川（三錢）草木」といふ有名な詩を詠まれた。四錢と一錢、二錢と三錢でどちらも五錢ですから差がありませんと書いてあつた。

日五十二月二十

機智は身を助く

○大正十年……萬國郵便條約を公布す

○昭和元年……大正を昭和と改元せらる

機智は中々工んでもさううまくは出ないものである。下司の智恵は後からといふが、機智もこれを用ふる機會を失すれば、氣の抜けたビールも同様である。その代りピタリと急所にはまれば、下手な理屈などの遠く及ばざる効果を現はすものである。或る學校の試験問題に横濱からロンドン迄の汽船の寄港地を挙げよといふ問題が出た時に、一人の學生はそれを知らなかつた。然しなるとか答へなければ零點になる、そこでうまいことを考へた。「本船は都合により急航につき何處へも寄港せず」と書いて見事及第したといふ。又或る人が或る會社の採用試験の口頭試験に行つたところ、これを試験する重役に、君は煙草が好きかと問はれた。ハイと答へた。酒はどうだと又問はれた。其人は「ハイ貴下と同じ位に」と答へた。これで此の人は見事試験を通過して採用されたといふ。

百姓昭明萬邦協和

○明治九年……賞勳局を創定す

○明治四十四年……小村壽太郎歿す、年五十七

先帝崩御のため今上陛下は直ちに踐祚の御儀式を行はせられた後、大正十五年十二月二十五日以降を改めて昭和元年となすことを詔らせられた。元號「昭和」の意義は、書經の堯典に「百姓昭明、萬邦協和」とあるより採られたもので、君民一致、世界平和を意味してゐる。百姓昭明、義は君臣なれども、情は父子と宣ひ給ふ大御心にすぎりまつりて、愛と光に和む春日にあたる草木の如く、國民は喜々として生活することを得るのである。昭和の御代の、若く男々しく、清く、美しく、強くあれ。民草は土のはぐくみ、日の光、昭かに、和やかに、生きんことを願うてやまぬ。春日萬物を育む姿こそ、昭和の御代の姿でなければならぬ。徒らに世を憂ひて悲憤せんよりは、雄大の氣を養つて、正しく明るく、御民吾れ生きるしるしある世に産れた幸福を感謝しなければならぬ。

何事もあなた任せや年の暮

○明治七年……西郷従道臺灣より凱旋參内す
○大正十年……青島守備軍撤退を完了す

何事もあなた任せや年の暮——と詠じた小林一茶は、その「一枚起請文」の中に「他力信心々々」と、一向に他力にちからを入れて頼み込み候輩は、遂に他力縛に縛られて、自力地獄の炎の中へぼたん落入候。其次にかゝるまたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚に反し下されて、阿彌陀におし誂へに誂へはなしになし置て、はや五體は佛染みたるやうに悪すましするも自力の張本人たるべく候」といつてゐる。然らば如何様に心得たらば御流儀に叶ひ申すべきやと問ふ人に「答へて曰く、別に小むづかしき仔細は存じ候はず、たゞ自力他力何のかのといふ芥もくたを、さらりとちらくが沖へ流して、さて後世の一大事は、其の身を如來の御前に投出して、地獄なりとも、極樂なりとも、あなた様の御計ひ次第あそばされくださりませと頼み申すばかり也」といった。

日に進み日に新たなり

○天保六年……井伊直弼大老となる

○明治十六年……徴兵令を改正し現役豫後備制を定む

今上天皇陛下は昭和元年十二月二十八日、宮中正殿に文武百官を召され朝見の御式を行はせられて勅語を賜ひ、これを國民に下させ給ひ昭和維新の根本を示させられ、さうしてその御勅語中に次の如く宣はせられた。

輓近世態漸ク以テ推移シ、思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ。經濟ハ時ニ利害相同シカラサルアリ。之レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ、舉國一體共存共榮ヲ之レ圖リ、國本ヲ不拔ニ培ヒ、民族ヲ無疆ニ蕃クシ、以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ。今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ、人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル。則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ、日ニ新ニスルニ在リ。而シテ博ク中外ノ史ニ徴シ、審ニ得失ノ迹ニ鑑ミ、進ムヤ其ノ序ニ循ヒ、新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル、是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ。

浮華を斥け質實を尙ぶ

○昭和二年……上野淺草間地下鐵道開通す

○昭和四年……東洋第一の清水トンネル貫通す

昭和御踐祚の御勅語には、又更に、夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ、模倣ヲ戒メ、創造ヲ勗メ、日進以テ會通ノ運ニ乗シ、日新以テ更張ノ期ヲ啓キ、人心惟レ同シク、民風惟レ和シ、汎ク一親同仁ノ化ヲ宣ヘ、永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト、是レ朕カ軫念最モ切ナル所ニシテ、丕顯ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明徴ニシ、丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ、實ニ此ニ存ス

と宣はせられた。明治維新の後、西洋文化の採用とその模倣とに急なるの餘り、やゝもすれば民族立國の精神を失ひ、肇國三千年の傳統的なる國民精神が、輕佻浮華に陥らんとした。茲に於てか、日本民族固有の精神を喚起し、質實剛健の氣象を發揮し追隨模倣の風を革め、創造啓發の氣運を開くべしと仰せられた。

日十三月二十

思ひ立つたが吉日

○安政五年……西郷隆盛大島に流さる

○大正十三年……ロツクフエラー帝國圖書館復興の爲四百萬圓を寄附す

徳川家康の侍讀を勤めた有名な學者、林羅山は、生涯勤勉な人であつた。或年の大晦日に、或る旗下が訪ねて来て、明春早々先生について御教へを受けたいと存じますと依頼した。すると羅山は形を改めて、「明春早々からとはどういふわけでごさるか、苟くも一度び志を立て、聖賢の道を學ぼうと思ひ立たれたら、明日と云はず今日只今よりお初めなされねば、到底志を達し得るものではござりませぬ。孔子の御言葉にも「旦に道を聞いて夕に死すとも可なり」と申されてある通り、明春早々から初めようといふ志は立てても、今夜そんなことがあつて不慮に死ぬやうなことがあるかも知れぬ。其時になつて無念残念と悔んでも詮ない事、古來聖賢の道に大晦日も正月もござらぬ。いざ只今よりお始めなされ」といつて、直ちに講義を始められた。

日一十三月二十

歲月流れて人を待たず

○明治十二年……エヂソンの白熱電燈一般に公表さる(一八七九年)

○昭和六年……滿洲事變に多門師團溝帮子に入城す

「春至り時和らげば、花尙一段の好色を舗き、鳥すら幾句の好音と轉ず士君子幸に頭角を列ね、復温飽に遇ふも好言を立て好事を行うて思はざればこれ世に在る百年と雖も、恰も未だ一日を生きざるに似たり」と昔の賢人は教へた。年を取るといふは、如何なる意味か。昨年は酒の爲に失敗したが、今年は夫れがやんだ。昨年は人の悪口を云つたが、今年はそれがなくなつた。昨年は人を羨む癖があつたが、今年はそのが止んだといふ様に、自分の決心と實行とが兩々相伴つて、より以上の向上發展が實現されたならば、それこそ眞の年を取つたのである。曆を繰返したからとて必ずしも老年といふのではない。そして此の意味で年を取るのとは、徒らに馬齢を加ふると異つて、星霜を経れば経る程、精神が若返へり、それこそ老いて益々盛んなり、老衰はしないで盛熟するのである。

修養反省備忘録

○毎日朝夕の寸暇を以て本書を読み深く自ら省みてその感想を以下の頁に書いて置くこと。

○他の書物を読み他の人に聞いた格言や處世の心得を書きとめて置くもよし。

○これから起る重大事件を記すもよし。

月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日

昭和十二年十二月十日印刷
 昭和十二年十二月十八日發行

〔定價一圓八十錢〕

編著者兼
 纂作者

國民精神修養會代表者
 太田雅夫

發行者

東京市神田區神保町一ノ四五
 齋藤熊三郎

印刷者

東京市神田區鎌倉町七ノ九
 川瀬丙午郎

發行所

東京市神田區神保町一ノ四五
 振替東京七九三〇番

崇文堂出版部

發賣所

東京市麻布區十番通リ
 振替東京七二八六五番

崇文堂小賣部